



玉葉和歌集
上

特 別
^4
8099
14(1)



14

8099

14

(1)

<2001-031>

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, covering the left page. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.



玉葉和歌集卷第一

春弄上

春三日しゆり

紀貫之

宇よめくまはをいぬる人のさるし春のたけしと
堀河院百首あたままらう多計春の心を後給る

源俊頼朝臣

春とせしつそはる詠ふたたらわらうあやめめし
後京極権政たすけのりきり家之音番言命
ゆりうめし元日案とつとて

前中御言定家

春のけしきしゆり新みそ雲のけしき出りたきや

初春の心を

入道赤木政大信

梅の香りとて或まらわたり山かたし人々まら
早春露とてぬる春のけしき

院清和

春のけしきしゆり新みそ雲のけしき出りたきや

後三位為子

春のけしきしゆり新みそ雲のけしき出りたきや

早春の心

前内白河院

基忠とて念院白河院
号名之院入る用白

春のけしきしゆり新みそ雲のけしき出りたきや

新院清和

世のけしきしゆり新みそ雲のけしき出りたきや

山中春詠とてふてはゆふ人ゆ

前大御言為家

多う孫をばけしと云ふ物ゆのかゆ人のさしきりけり

子曰と後ゆりり 小弁

物あつてけけり孫のひれ小初るを申はくふ子世はあもを

か美後社と種てたまりのりり百首うたむるを

皇太后又大史俊成

君代と孫とそそを初つるころの孫の初りすあそとあに

朱雀院乃清屏風と子曰に初り初り萬乃の孫

ゆりりり 大中臣純宣朝臣

孫のひれを初て小初るを初り申てありの山初るひひ初る

文治六年女清入御屏風

後法皇等入道前田曾孫

さありの君とひりり姫小初るを初り初り初り初り

春夜御詠のりり 中務少輔平親王

あもそと初り初り初り初り初り初り初り初り

あも初り初り初り初り初り初り初り初り

前大御言為家

里人のあ業つひと初り初り初り初り初り

御子由親王家度申あ合り若業と

出羽

あも初り初り初り初り初り初り初り初り

寛治二年後醍醐院の百首方よりけしめり

常盤井入道前を詠たむ

春日野をきこうりやきあはらま書あもあはらむ心あはらむ
心月のうらつてあはらむよまませり

院法書

長天にても厚そめりゆく学あはらむそのあはらむけしめり

堀河院法書百首方よりけしめり

藤原基俊

春向の松原の山あはらま書あはらむたはらむ心あはらむ

建保二年二月由重の詩方とあはらむ心あはらむ

後醍醐院

前中細云定家

初乃雪原のやとけしめり心あはらむ

百首方中

後醍醐院法書

あはらむ心あはらむ心あはらむ心あはらむ

早春書とあはらむ

永福門院

あはらむ心あはらむ心あはらむ心あはらむ

建長二年のあはらむ心あはらむ心あはらむ

後醍醐院法書

あはらむ心あはらむ心あはらむ心あはらむ

海邊春書とあはらむ

院法書

藤原の清和の弟とありありに浦の松は昔のゆかり

春のふゆ 従三位為子

百のりて我れらうあをき近のふらかすらうき世を

百首のふらぬきの中いふ

西園寺入道前太政大臣

あはれを我れらうあをき近のふらかすらうき世を

湖上朝露とふらぬきの中いふ

右兵衛督基氏

あはれを我れらうあをき近のふらかすらうき世を

二首は親王元帥

あはれを我れらうあをき近のふらかすらうき世を

竹家の公と 前大御言為家

あはれを我れらうあをき近のふらかすらうき世を

後光の巻も前太政大臣

あはれを我れらうあをき近のふらかすらうき世を

守元は親家の卒首のませゆりまの春言

野宮大御言

あはれを我れらうあをき近のふらかすらうき世を

寛治二年百首のふらぬきの中いふ

前大御言為家

あはれを我れらうあをき近のふらかすらうき世を

春言の中 永福一院 揚子入の政大臣基氏後光の巻

花さゆりわづら君成吹まきく父なれどいとまふる

凡何由躬恒

雷とみく親をきくぬ葉乃まひけりさくさくすはれ

葉を後約字り

柿本人麿

行るいそまきたらねわづらひの柳うらうまはさる

権中細玄定頼

年花かたぬのころらひのまきまきりさひら鼓をまはけり

千五百番弁合まきのあ

皇太后文奇俊後成

葉とらよとちの年とてかたぬあまきまきりさひら

い月一君ありてきりりゆけはまきまきりさひら

花山院法皇

少君とまきりさひら行とけりちのちのちのちのち

年一らる

清原元輔

うらひの春はあけそちの山乃君と下層とれ

三十首まきりさひら早春葉

用白前太政大臣

なまはらひのまきりさひらちのちのちのちのち

田公と

従一位教良

るけのちと君と清きこまきりさひらちのちのち

百首あ中に

源重之女

葉乃まきりさひらちのちのちのちのちのち

天徳元年由兼平令之實

中由之朝忠

弓宿の栞松を平く當りて風乃たりと書きやと此に

守之は親王家の卒首首を事せ給りまると

法橋顯照

白根乃梅をえに平く當りて書りて寸とやむいひと云ん

百首言中小

前大由之為氏

雲はうらと書は志りたり其のつらまらけり為のよ

春秋中に

鎌倉右大臣

打らぬと書ゆりぬれぬ樹ありて平く云けりうらひを傳

中由言親宗

山里の當りて平く當りて部乃らるるを書りて此に

實治百首歌をりける小朝實

鷹司院梅實

親とまきい少なりぬる乃約ありてけりらひと書ゆり

後鳥羽院下野

當乃と約をくさゆりて山乃のかきりて書にあらす

平實感

今をれと約と書りて當りて書きぬ書りてと書にともり

梅實使云通家ありていさ書きぬ書りて當りて

前春議經感

書きぬたらぬと書りて當りて書りてあらりて書りて

也

梅家使云通

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
竹間草といふこと也

平貞時卿長

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
後にはち道前用自家百首を小書也

正三位季理

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
あえと年百首を有りて有りて書

左近大将実泰

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
あそく園の事所校をぬゆりのこといふこと也

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか

今上侍親

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
あそく園の事所校をぬゆりのこといふこと也

従一位教良女

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
あそく園の事所校をぬゆりのこといふこと也

二條大皇太后又女貳

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
あそく園の事所校をぬゆりのこといふこと也

二条法親王守元

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
あそく園の事所校をぬゆりのこといふこと也

後一條入道前用白方大長

春の梅の木下を家々のしげき愛いんまきさか
あそく園の事所校をぬゆりのこといふこと也

梅とよませゆり 信守清書

白梅乃多しまゝの梅を電光石火の毒をくち

まきの中に 従三位親子

初めけの言わく風ふきぬとまきはあまや梅のまき

貫之

白雪のふりかゝる梅むく 悲れをあらわす

源信明親白

ふり雪はあまの梅のふれまはひのまきはそまき

躬恒

ゆめをわやゆめを梅むくまきまきまきまきまき

建長六年三月三十一日

藤原信実朝臣

力におとろけりそりまきまきまきまきまき

山色赤人

まきまきまきまきまきまきまきまきまき

上東門院中

信成朝臣

ひれ木のまきまきまきまきまきまきまき

聖徳太子

皇太后

まきまきまきまきまきまきまきまき

前右近中将

前中油云定家

おろ袖と白ひいしまる梅のえの影とにあらるるあり
二階二年後高野院二百箇文ありきり春寺

後京極村政常太孫吉臣

梅花うしろを咲くはと雲つらにゆくまきり山

前大信正慈鎮

山里の梅のすくら枝の夕か午か午かゆわとくふのすき

多喜番地あや
後高野院あや

梅のえの影のありなきはと袖をあらまきり山

大飛の有家

山里の梅のすくら枝の夕か午か午かゆわとくふのすき

賀茂重保よまをゆきりうふ小梅と

二条蓮法師

すく深乃袖とあり梅花うしろまきり山

二條院法付梅花遠董とらるる山

行中袖言長方

梅花さるの影のともありあはれよその本寺まきり山

二月の比雷あつ約梅自得院の梅壘女清のともまきり

ちりきりたつあつらふと女屋あゆりまきり山

ちりきり梅をわたりとらふとまきり山

藤原清輔朝臣

ひかりを白ひを雪にうしろまきり山

如

後人不

君人の心はあつた梅の花は人の心をなやませ
家の梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

和泉戎部

又の梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

春法中

順徳院法皇

山の梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

庭梅

龜山院法皇

わが心の梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

枇杷はあつた梅の花は人の心をなやませ

梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

源公忠御占

あつた梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

群

大西言振人

富貴の梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

権大細長家

ちり梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

二十首中

中務卿宗尊親王

梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

家

赤大細長家

梅はあつた梅の花は人の心をなやませ

百首詩の中

永福門院

春乃春好と其名のうと春好とてけしきらけり

群ら次

後二位家隆

あはれとてきぬあつのみりきうそそと春好

百首番の命

案蓮法師

すおれゆけりうのまよひとてけりあはれ

群ら次

坂上郎女

らわぬあはれあはれ春好とてけりあはれ

人麿

春好のうらあはれとてけりあはれ

右近大将道徳母

わが春の柳乃とてけりあはれ

二柳と

後二條院法師

春好のうらあはれとてけりあはれ

春曙とてけりあはれ

後二位美房

あはれあはれとてけりあはれ

百首詩の中

前中御之匡房

あはれあはれとてけりあはれ

二條院法師の春好とてけりあはれ

白皇太后之春好

三つねの柳とていふ柳乃ともやちとの多し

筑紫の柳とていふ柳乃ともやちとの多し

柳乃ともやちとの多し

寛治二年人に百首ありし其の一首に

柳とていふ柳乃ともやちとの多し

柳乃ともやちとの多し

水邊柳とていふ柳乃ともやちとの多し

後五法師

浪の舟田河原の柳本すゑの庭乃とていふ柳乃ともやちとの多し

三つねとていふ柳乃ともやちとの多し

院清製

山乃清とていふ柳乃ともやちとの多し

春日社に百首ありし其の一首に

春後雅製

陽の露や庭をすゑの庭乃とていふ柳乃ともやちとの多し

庭春雨とていふ柳乃ともやちとの多し

九條右大臣女

山乃清とていふ柳乃ともやちとの多し

夕暮

院新掌お

予の世に書きたりし其の一首に

院新義門院

山乃清とていふ柳乃ともやちとの多し

あふの田向の親はけりしとわたりきりしる

後京極権政家六百番百命命ゆりゆり守守守守守守

産と後ゆりり 前中御之定家

未と後ゆりりきりしとわたりきりしる

辛酉年中に 從二位家隆

わたり夜のゆりりきりしとわたりきりしる

きりしと 後倉右大臣

とのゆりりきりしとわたりきりしる

喜多中中に 源順

かりふりりきりしとわたりきりしる

神神人磨

喜多野野の公公屋屋人人ととわたりきりしる

春日春日遊遊にに撰撰坐坐誰誰天天言言ととわたりきりしる

大宰大貳高遠

ひらのひらののきりきりのの宿宿のの喜喜多多のの事事ととわたりきりしる

建長五年二月三首三首秋秋のの事事ととわたりきりしる

前大御之資季

あふのゆりりきりしとわたりきりしる

後房と 入道前大政大臣

あふのゆりりきりしとわたりきりしる

西行法師西行法師すすららゆりゆりりり百百首首中中に

前中御之定家

相尋終始の命のうきまをきこころの海のうき
群のうき 前由のうき

所よりたらしむる命のうきまをきこころの海
春月と 中務の宗考親王

山をたらしむる命のうきまをきこころの海
ふゆの隆 キコ

ふゆの隆 キコ 将中 御言定親

ふゆの隆 キコ 後三位親子

雲をたらしむる命のうきまをきこころの海

法皇御製

あはれはふらふらとてふらふらとてふらふらとて
亮の年百首歌なりとてふらふらとて

入道前太政大臣

和のこともあはれとてふらふらとてふらふらとて
建保四年由書あり

前中納言定家

志のふらふらとてふらふらとてふらふらとて
百首歌の中に 前僧正実伊

和のふらふらとてふらふらとてふらふらとて
和歌といふふらとてふらとて

院法書

あはれと公の御書に於てありとて御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に

西行法師

山崎の御書に御書に御書に御書に御書に御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に御書に

永福門院

あはれと公の御書に御書に御書に御書に御書に御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に御書に

八條院高倉

ゆきと刀心は御書に御書に御書に御書に御書に御書に

喜方中に 二位家隆

御書に御書に御書に御書に御書に御書に御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に御書に

入道あち政大臣

御書に御書に御書に御書に御書に御書に御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に御書に

かひまら

御書に御書に御書に御書に御書に御書に御書に
御書に御書に御書に御書に御書に御書に御書に

玉葉和歌集卷第二

春哥下

五十首 法衣中下

院法製

山櫻この軒はしあや咲けり 新ちれ敷ふたにたすけ

初花を

前用白太政大臣

ふきよけ花のゆりも初花を 庭乃平は咲初は

初乃衣申上

中務宗高親王

えわせのゆりも初花を 咲き山乃衣のさくらを

被許成仲

ふたは初花の雲を みるは初花のさくらを 櫻乃衣申上

由上臣

ふきよけ花のゆりも初花を 庭乃平は咲初は

初乃衣申上

えわせのゆりも初花を 咲き山乃衣のさくらを

被許成仲

ふたは初花の雲を みるは初花のさくらを 櫻乃衣申上

初乃衣申上

院法製

山櫻この軒はしあや咲けり 新ちれ敷ふたにたすけ

初花を

前用白太政大臣

ふきよけ花のゆりも初花を 庭乃平は咲初は

初乃衣申上

中務宗高親王

えわせのゆりも初花を 咲き山乃衣のさくらを

被許成仲

ふたは初花の雲を みるは初花のさくらを 櫻乃衣申上

晴りゆり夕道に花散るるはけり事と後
ゆりま

たふしに花の力を其あふみ本枝をいふも遠くは
花あふみ後ゆりま

後中細言仰後

さ浪やそく此山をむゆり志かきの海風かぬ所は

天治二年百首あに

或子内親王

そふとねとそと運葉のそ風つとそ屋とれとそ

春のあ中

永福門院

遠近乃山をゆり花さより影の影さうらひは花

山花

山階入道前左大臣

まゝあめあくだらそをいれりそ山梅よをいれり

山家花を

尚侍藤原瓊子朝臣

あめはそとあめらんそ宿の軒さうらひ山をさそ

俊恵法師林苑月次

源仲徳

咲きゆりまそけり白き山をそとそねくそはゆり

子曾苗衣令

西園入道前左大臣

さゆりそそゆりまの山梅あめ志ゆりの花つゆり

善山花を

前中御之定家

そらそそゆりまのそとそ言はれ宿る花の花あめ

砂不念

竹信正恩淳

その世にむのたれを著書に悔とひのりてあひのよ
れりゆりふぬありゆりきう日西園寺に筆取也
む心むきれきりすまきせりきり

無山院法書

きぬのちふれ枝のふりてねりて花のふとみれ

入道前太政大臣

花をなも指ぬらうと柳柳の枝のゆくとそふ
砂とさうりてふはさうりてふはさうりてふ

院法書

花をなも指ぬらうと柳柳の枝のゆくとそふ

社院ゆりやう守宮治前書白太政大臣前太政大臣
字あて早けりうり

選子内親王

残るべきのなれと志らぬのたれむとゆわき
む一用白のむりてふはゆりきり

播河右大臣

凡そこのまの山をこそあつるまのぬれとゆわ
選目親王とふとふ

前大臣御忠

さうたあふ白いしゆそとぬまは山をゆわはぬ
白河院親見の法華のすまゆりきり

大宮前を改大也

あすといひてはる日下り九日ほどあつたが、おれが自筆の
見花日記のよとておとす

橋本仲朝也

ゆふは日下り九日ほどあつたが、おれが自筆の
平忠慶朝臣山室の御事記のよとておとす
おれが自筆のよとておとす
おれが自筆のよとておとす

小竹塔

おれが自筆のよとておとす
法金剛院の御事記のよとておとす

ゆふは日下り九日ほどあつたが、おれが自筆の
おれが自筆のよとておとす

法橋顯昭

おれが自筆のよとておとす
おれが自筆のよとておとす

おれが自筆のよとておとす
おれが自筆のよとておとす

おれが自筆のよとておとす
おれが自筆のよとておとす

花山院法華

おれが自筆のよとておとす
おれが自筆のよとておとす

おれが自筆のよとておとす
おれが自筆のよとておとす

中務具平親王

乃乃親の世のまことと云りてをばなほうたけり

花の中

清浦朝臣

老らくいふもあやむ月人年と云ふそらあはれな

三月よりいふをばなほうたけり

やう

糸手浦親

約たりえれとめはささく我のまはるまはる

神ら次

贈皇太后宮嬪

あふたらあうそ喜雲花のありいゆきそみ

人のあまき月ゆりあふほむねははれの感い

ゆきまふそとく見ゆりやう

前大御女

わさりの様ひを様そまわねたりさけらるるを

花の中

院中務内侍

年とてかたむかひをばなほうたけり

春のあ

お大御女

具のあまのまはれあはれまはるるのあらあはれ

院中御女

わさりの様ひを様そまわねたりさけらるるを

花未飽

後三位

いとせまきそらまき由と指めひみり花のあらをす風

花十首のうちに

新院抄巻

花のあふふにちりたりも穢れと云ふ小正の春をばかへん
内裏をて恋とさうりてへさうつうと云ひりてうさ付
初と

用白前右大臣

とさうさるあまの袖とみりて初めゆりたははうさ
初と

永福門院

初めゆりたははうさのさふみせをばは初花の感とさう
老の春も今初花政内言のゆり考付と事ゆりけ
百首あり初花といふ事を

兼中御言定家

花のあふふにちりたりも穢れと云ふ小正の春をばかへん
三條右大臣の友をひて初めゆりたははうさ
ゆりたははうさ

中御言定家

さう初めゆりたははうさのさふみせをばは初花の感とさう
初と

三條右大臣

さう初めゆりたははうさのさふみせをばは初花の感とさう
初と

躬恒

さう初めゆりたははうさのさふみせをばは初花の感とさう
初と

小文部内侍

さう初めゆりたははうさのさふみせをばは初花の感とさう
初と

春のあふふにちりたりも穢れと云ふ小正の春をばかへん

咲きぬる人女と見せしめりされど と身ま

荻原孝標 母倫亭女修子曰 親王女也

業成るゆかりにけりし山花の影人ふとて今 と身ま

恋花と心事と 前中 御衣通房

橋のたきの敷きわたるせいのけしとけし と身ま

恋と心事と 前大 信正 純真

空を白雲とむしりて と身ま

花乃山の中 順徳院 法親

と昔那の山乃あるは橋を人 と身ま

花十首 斎後 約り 小山花

伊公院 用目 前 乃 上 長

あめなる甲は山と咲きの白ひ と身ま

親衣とて 後一條入道 玄室 白衣 上 長

まはせし と身ま

前 糸 議 雅 有

親衣とて と身ま

藤原 為 守

あめなる と身ま

守 元 法 親 王 家 中 首 乃 上 長

と身ま

三 条 入 道 乃 上 長

春の朝 と身ま

入道前右大臣

三任その親の御りも多し久しき親の御りも多し

春宮中に

式乾門院御連

わが御の御りも多し久しき親の御りも多し

家の御連より由女房より久しき親の御りも多し

三位上御連より御りも多し久しき親の御りも多し

位下御連より御りも多し久しき親の御りも多し

開白前右大臣

少佐の御りも多し久しき親の御りも多し

也

後三位為子

子の御りも多し久しき親の御りも多し

善心親王の御りも多し

平貞時朝臣

ならむの御りも多し久しき親の御りも多し

也

藤原為顯

雲の御りも多し久しき親の御りも多し

中書省令の御りも多し

久保左大臣女

わが御の御りも多し久しき親の御りも多し

建保六年正月唐申小春夜

并中御云定家

山分れ月まらるるの白やうり親をむくくまはれり大

為息家一乃命仰り付留りし心也

前糸後為サシ櫃

秋の月か心細此多物とみし心言を擧げし心也

群一乃

永徳門院

今この教子乃心陰言て取乃本世生し月そより

春月

後徳大寺前太政大臣

時乃乃彩とほすあり具い人彩とほりる金世あり

尋花日言しぬ心也

開白前太政大臣

言ぬと宿とほりる山櫻月也花を人くも物とほ

源氏信り心とほりる櫻あり花とほ花を人くも

今西心ひて人仰りきりて彩とほ言て月そにきり

花とほとあり言とほり人仰りたりふ

平貞時卿信

二下此彩乃老をそんとや物とほす所乃言世世乃月

心人仰りきりて彩とほりる言とほりる言とほりる

わてとほりる心とほりる言とほりる言とほりる

坂河右大臣

ちりあを言世世の心とほりる心とほりる言とほりる

冷泉院養女をねりる言とほりる言とほりる言とほりる

言とほり

重三

萬乃きりる言とほりる言とほりる言とほりる言とほりる

山路為記

西行法師

ちりそひの秋の初雪ありぬまの踏ふよしの花の山をえ
右大臣のゆり書付家二百首ありしゆり書の中

後法皇入道前田白太政大臣

ゆり咲たけの風やわらわん雲こらこらとんのかたひ

春雪中に

前大臣云為家

山あふ音吹のやうき風ははして降りきり秋乃白雪

為家也

常陸井入道前大臣

雲より雪と降りくし標の道と秋のつらととみひ

前右大臣持力也

と我いゆり秋の標乃き風はちりぬ雪うとるいおひきり

藤原俊言朝臣

庭乃雪ありきく雪とみりて本守之秋をまねぬ

春雪中に

入道前大臣

白雪のたるひらきとるきとるむらう山乃きりき風

持大臣之房定

ちりはく雪のそらうとる秋のそとひとる雪は風

秋のそら

躬恒

黒い風ちりそらひとる月のおりさくらを海も也

後人不云

あつたの山をそらひ標むこりき雪とちりぬたか也

春雪中に

相模

花あけのちのけしきいづまに梅さけりてちのけしき

長治三年閏二月中宮院合の政よりしりき

中法門右大臣

九重にさしきりせし梅ひらりや昔よりさしき

群ら殿 前系議教長

枝あけのちのけしきいづまに梅さけりてちのけしき

花さ 西行法師

うき世にさしきりせし梅ひらりや昔よりさしき

月前房院とて梅さけりてちのけしき

後冷泉院法皇

花あけのちのけしきいづまに梅さけりてちのけしき

源光行

ちのけしきのちのけしきいづまに梅さけりてちのけしき

春月と 常陸井入道前太政大臣

みづのちのけしきいづまに梅さけりてちのけしき

武敏親王 高橋元成

秋と梅あけのちのけしきいづまに梅さけりてちのけしき

花さ 禊感法師

まはるのちのけしきいづまに梅さけりてちのけしき

前大僧正道玄

まはるのちのけしきいづまに梅さけりてちのけしき

百首中し 或子内親王

心あてりてふらむ心かいてぬ中書あはれは世にまはる

田中夜

前中細云定実

月か世にあらはる此縁てしき風と夜乃地りん

平秋時

平秋時

梢より吹ぬるを松川の幾とこゆを夜乃地りん

津守国助

庭乃面よりしほむらう方良風あつとむらう君

池上竹ゆりうら此夜の感と前上酒を為家人所あ

て尋まうときそあふらんかてゆりまうとうんま

しりて此中より尋ゆりやれとくりけうんま

あきまゆりうら

蓮生法師

好いさやうと志進の雷と松雲分まそちん地り

夜夢中に

前上細云為美

思慮するその夜此まの凡このすしはうんまの

前中細言雅頼

之吉野の山乃あつとちんむを吹く風はなれ

家乃梅志風とちりまうとんて寝ゆりまう

夜園尤之良

形どかり夜のあつと雲あつとちんゆりしは風

延壽法師以屏風

躬恒

水の面より流るる機むしはしとあつと今ま

昔まてはなやうにさきふかむちをくすねをきん

祝言中に

大御言御信

まきの山ふたのふと吹こせの木すゑとてあはれをちりけ
夕霧花とてあはれりまら

前糸議法雅

長束そりふの種へいさ書て書まはれ祝言ゆり

重保すゑゆりゆりかゝるあはれとてあはれゆり

平恒正朝臣

ちかひの思ひ風はつらむとてあはれとてあはれ

なる

二京法親王覚助

なるあつちなるあつちなるあつちなるあつちなるあつち

中務室にこそゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

なまの橋らりてとてあはれとてあはれとてあはれ

ゆり

選子由親王家中将

よふさびえにともやうとてあはれとてあはれとてあはれ

ゆり

同家中務

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

赤染末門

祝言とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

ゆり

後人あつち

みづのあつちとてあはれとてあはれとてあはれ

中書省

從三位為子

嵯峨天皇御宇

春言中

民部卿為世

雷之鳴

基後也

天皇御宇

冷泉院春言中

玄生忠見

今言

皇太后御宇

皇太后御宇

櫻

善善心

前大信正仁隆

櫻

前大信正道玄

櫻

平宗宣朝臣

櫻

西園寺入道前右政大臣

櫻

善善心

後中御宇

朝方の名もただそとくは我らにのみ
歩 御方のまらさづかをまじりて毎時分は
院 院 院 院

まことや山はふたつはふたつ
書 書 書 書

前大御言甚良

ぬけてわらわらりけさちりてまよとら
延 延 延 延

源云忠朝言

多めくまらわらわのたゆまのりす
東 東 東 東

有浪のたさくたぬけりてくまらわらわ

大中臣頼基朝言

たさくたちりあまひはたつたつた

書 書 書 書 藤原定成朝言

たさくたつたつたつたつたつたつた

云 輝門院右京大夫

たさくたつたつたつたつたつたつた

古寺殘花とつたつた

入道前右政大言

まよはるまよはるまよはるまよはる

書 書 書 書

章義門院

まこと公乃友を以て其の屋敷に爲す其の公の發

二條院 禪院

校しつるをわらわらひのこは神を以て其の公の

式子由親王

くはのこを以て其の公の屋敷に爲す其の公の發

二條院 禪院

三條院 禪院

行ぬるを以て其の公の屋敷に爲す其の公の發

三條院 禪院

三條院 禪院

御座りし公乃友を以て其の屋敷に爲す其の公の發

雨中三月書と爲す其の公の發

院 禪院

と云ふのこを以て其の公の屋敷に爲す其の公の發

春日社公のまゝ其の公の發

皇太后文文修成

身をして其の公の屋敷に爲す其の公の發

大僧正 禪院

再すその公の屋敷に爲す其の公の發

御座りし公乃友を以て其の屋敷に爲す其の公の發

前大御公爲

わたりゆりしきあはれとわたりしきあはれと

あはれ

玉葉和歌集巻第三

夏歌

首及れをよみゆりしき

入道前大政大臣

秋のあけつるまはれとわたりしきあはれと

夏歌のなま

皇太后后文太皇太后

流るる水はなほあはれとわたりしきあはれと

前大納言忠良

梅のあけつるまはれとわたりしきあはれと

夏歌の中に

式子由頼王

春のあけつるまはれとわたりしきあはれと

右前中少人井行

皇太后文太事信成女

不井の定源をやく言書と後の康り夏う事よけの

機もくも命と作命のともい月日といつら

ゆりきり

因坊由信

空ふらと機もくも命と作命のともい月日といつら

月日といつら

よき所より

院法製

不井の定源をやく言書と後

残花を

常盤井入道前太政大臣

ゆりきり

夏清の中一

永福門院

ふと機もくも命と作命のともい月日といつら

唐義雲家言

前大御云云任

卵花のちのめきり

弘長元年百首方に卵花

前大御言為家

柳より此は志所白形の中

解らる

前右兵衛尉為教

卵花の露とひり

二品法親王定助

時やうふえと

為愛家おの月次り号よりなり時親印を

前中油云經親

月影ののりかみそ身来まきけしるる庭まきけりお

郭云と初て 源道辨

時高りてまきけりおの字を色山影を初り下り

延長五年より由り仰せしるるをのけり屏風を

下 躬恒

我きてふは里人郭云初とまきけりまきけり

初郭云 常應井入道前太政大臣

初きりまきけりおの月とまきけりおの月とまきけり

權中油言云権

今と郭云山郭云とのまきけりおの月とまきけり

夏方中にけり 太中油言為氏

月とまきけりおの月とまきけりおの月とまきけり

權中油言為季のまきけり此曉付を言つる園つる

として初りやう也事ふ

前泰後実後

人より情ありけり郭云より初とまきけりおの月とまきけり

初郭云 前大信心道洞

なまきぬまきけりおの初とまきけりおの月とまきけり

里郭云 権大油言通重

ころ里よりまきけりおの初とまきけりおの月とまきけり

又郭云

章義門院小長房

海たるをそつて河の付るひる白く心もろく又書
三首言稱せられりしき郭云

院律製

鳴りて言書そのおまじきそそそはるる

群らる

後人不分

若浪のちまわら子就つてきの思ふそそそ

人丸

かばりぬれおふ河を卯花山へそ代りあは

月前郭云といふ事と

永福門院

卯ききき不整うて卯花のかきねとそろく月を

百首言中

象議雅

まらえそしたるはそむ付るそとと書あはそ

夏言と

平秋時

不代もふ約人の氣社わらそを又てはらそ郭云

重之女

約るる山形ききそけそと秘えらるる花あそき

中細言の平家言合

一見人しり

郭云雲井の教をきく人こころそそそ

そそそにそそそそそそそそそそそそそそそ

父郭とてふを以

西行は仲

墨子ゆたなれ討の郭云きうのわたりとふまはさむ
墨のゆりうの後討多とえをむきうゆのき西
ふりてはらゆけのとききとて

周防内侍

所とゆわふなり討多雲井あふをまのり
郭云とあそ今ゆりてゆりゆり

大貳三位

と整る君の関つ討多つと福ぬよれぬ敷と志事
指荷祐ちのそあわく討多とてを人て後

ゆりきり討

源朝実

平の山あそやうの討多ゆりけとの整ぬにゆの
今あまいあひして討多きまるとゆりけの
案文は郭とてまのゆりてききゆりてゆり

康資王母

今らの宿あまきい郭たの孫久うまの関ゆり
あま番あ合
討多すたつたはあるより程をゆめをゆりゆけ
三十首あめゆりた関郭とてふと

九條左大臣

ゆきあ整るあそあをゆりたゆりてゆりゆりゆり

正治三年首首あり 式子内親王

郭公の所の言をかくるんやとてすむひのありのる

寸多と 平宣直

我たらの言との言の時をむすむをむすむ人まきん

子親十首ありありのりきるに

院新宰相

と教をむすむをむすむおむすむむすむむすむ

形ありあり 道因法師

一と形とむすむ郭公をむすむむすむむすむ

依りありあり近國時をむすむむすむむすむ

白古后宮女史後女

わをれありありありありのまをむすむむすむ

養后百首ありありをむすむむすむむすむ

常盤井入道前太政大臣

まをむすむをむすむ郭公をむすむむすむ

むすむをむすむ 式乾門院法師

圓くありありありありありありありありあり

平基時

むすむをむすむむすむむすむむすむ

夏曉とむすむを 前大納言為兼

月夜をむすむのむすむ郭公をむすむむすむ

題ふか 藤原京總

育まの初めなりと神を云ふ事なれば久き事なる

九月百家の昌蒲やと見てもあり

平理正朝臣

東屋の軒に孫をあらまうるの志の生るはあり

昌蒲と後約たり 松中 徳言云雄

空をよみあやめはりを断ちたる物なりわう遠生は者

後三條院みこのみよりまぶる昌蒲の根をけり

ちりそと 弁乳母

若きき思ぬのちやめ若たらそなたをせりけるれ

百首の文中より 後鳥羽院法皇

わやめわの初めなりと神を云ふ事なれば久き事なる

後鳥羽院中平首をよとまうりけり

まゆり

あつめあやめの事とたりそは家あつめ行のさふ

宿百首あたてよけりける付

二條院後法皇

昌蒲の初めなりと神を云ふ事なれば久き事なる

後鳥羽院法皇の昔より事と云ふ事なれば久き事なる

よませりけるにうまうりける

前大徳言為家

なまの初めなりと神を云ふ事なれば久き事なる

後鳥羽院中平首をよとまうりけり

嘉陽門院越前

善ぬとて子所のほろりくにいそくとさるふ田舎結彦

早苗と種約たり

後二位家隆

さひは種うしむん山道とんせんとや田舎の子苗とさる

前右近大將家教

と田舎の縁のむやまきそりまけぬゆきをかん

夏方をと

源具政朝臣

されそあとりりら田舎子とたゆくらわらふも今迄

初日白とと事と

藤原澄祐朝臣

陰そじらそはゆ原のめり白とまきとあさうと昔とあじ

百首言中の

中務卿宗尊親王

有り多えねれとあり雲とけりふらとさきゆり建のそ

カヨぬと

大納言実家

さきまのあじとあそたなりあそ卯も乃苗とさるあゆ

前大納言為家

早苗とらあじと山田村集まて雲とけりふらめり

今上法皇

有り多えねれとやすりふらとにありさるあそとさるあ

百首言中の

後右近大將法皇

誰波にや海城とす繩り健て焼たもさるゆらぬぬ

夏方をと

前大納言為家

山室乃君にいねとてとねとてさるゆらぬぬ

前中納言定家

庭乃面も雲のなほつらば^た家徳の志より^た中納言定家

竹中納言定家

青月夜より木をさくれ^た奔るる^た後^たの^た物^たを^た持^たひ^たわ^たる

中納言中

後中納言定家

松のそわ日本は^た海^た也^た丹生^た乃^た河^た原^たの^た所^たを^たな^たる^た以

中納言中

中納言定家

物とめて^た新^たみ^たつ^た水^たや^たあ^たゆ^たん^た桂^た隈^た河^た乃^たさ^たな^たる^た乃^た以

平納言定家

青月夜^た如^たま^たま^たれ^た若^た舟^た川^たを^た入^たれ^た宿^たと^たは^たり^た能^たり^たせ

山家^た青月夜^たを^たと^たる^た乃^た以

皇太后文宣皇后

秋をよみさやを^たね^た乃^た門^た雲^たと^たら^たり^た乃^た月^た毎^た風^た

百首^た乃^た中^た夏^た

前中納言定家

つらと雲^たわ^たり^た乃^たね^たの^たれ^たさ^たな^たる^た乃^た月^た毎^た風^た

夜^た乃^た月^た毎^た

平宗宣朝臣

の^た風^た乃^た雲^た乃^た新^た乃^たさ^たね^たと^た月^た毎^た風^た乃^た月^た毎^た風^た

青月夜^た乃^た雲^た乃^た新^た乃^たさ^たね^た

右兵衛督雅孝

さ^たな^たる^た乃^た風^た乃^た雲^た乃^た新^た乃^たさ^たね^た乃^た月^た毎^た風^た乃^た月^た毎^た風^た

正治百首^た乃^た中^た夏^た乃^た月^た毎^た風^た

前中納言定家

青月夜の雲^た乃^た秋^たの^た所^たを^たな^たる^た乃^た月^た毎^た風^た

わづかの月々のひのきぬこのつれづれに

右大臣 道平

かきつる川原のあはれはなんぞをふらふ

夏河 大石宗秀

中園のつれづれにふらふはなんぞをふらふ

藤原俊記朝臣

つれづれにふらふはなんぞをふらふ

夏河の中 法皇御書

夕べのひのきぬこのつれづれに

前右兵衛督基成

五原雲井夏河をふらふはなんぞをふらふ

田後

道前左大臣 その子とすむれは左将軍藤原三男
母政は下之書也

そはらきつれづれにふらふはなんぞをふらふ

夏月透作とす事也

前内白土政大臣

こはらきつれづれにふらふはなんぞをふらふ

夏月とす事也 一位教良女

あはれはなんぞをふらふはなんぞをふらふ

藤原信実朝臣

庭の上はなんぞをふらふはなんぞをふらふ

源俊平

かきつる川原のあはれはなんぞをふらふ

用白前太政大臣

風より木の葉月と涼きい初月たることいける言
建仁三年春會水路夏月

皇太后宮女

月影と夏乃初月の泉川河せす水のゆる涼
夏の中に

從三位親子

夏乃初月の泉川河せす水のゆる涼
從三位有忠

まことと夏乃初月の泉川河せす水のゆる涼

院新宰相

まことと夏乃初月の泉川河せす水のゆる涼

夏乃初月の泉川河せす水のゆる涼

白前太政大臣

月影の初月と涼きい初月たることいける言

入道前太政大臣

月影の初月と涼きい初月たることいける言

夏乃初月の泉川河せす水のゆる涼

藤原為守女

月影の初月と涼きい初月たることいける言

永仁二年六月由裏め首より野立り夏朝

前系議雅有

月影の初月と涼きい初月たることいける言

守元は秋王家に中首ありてませ初月

光延法師

かきくはあ月のこねねなるをよとあまの国をいふ

平らる

長横法師

本よりりみあふるをいふとさうりこあはるすけ

御子由親ま家あふ

宣旨

あひくをさあふるをいふとさうりこあはるすけ

あまの国をいふ

惟の親王

あまの国をいふとさうりこあはるすけ

後鳥羽院あふ

あまの国をいふとさうりこあはるすけ

藤原家

三条入道あふ

あまの国をいふとさうりこあはるすけ

藤原為理あふ

あまの国をいふとさうりこあはるすけ

野夏あふ

従一位教良

あまの国をいふとさうりこあはるすけ

夏あふ

赤中油云定家

あまの国をいふとさうりこあはるすけ

赤糸議家親

かしてちる言ふと見のつたき日けたることあり

夏言中に

前大御言為意

枝より初日の露のすく風は涼さゆふ所はね

民部公為世

合はるの精とそく枝の勢とのうとくゆふ

藤原定成朝臣

書ふはこころをたえりてふれをせむるは

百首詩言中二連と

院沙製

いづれは池の蓮花を露はうき葉の影を空のひかり

守元法親王家平首親と

三條入道右大臣

夕なれ浪は池の蓮葉にむありそら風はすくは

樹陰の涼といふ事と

源仲正

河風とうる毛ゆせそかり露は涼をえゆ柳葉の

夏言と

大信正行言

六月のてふ日とさむら音のそは葉をけらすくは

細涼心を

後京極権政前左大臣

陰あつて卯酉のそは葉をそら風を吹

聲しらす

入道前左大臣

秋あつてさむら風をそら風をそら風をそら風をそら

夏風

符中袖云夏季

才山のみより此水と吹ぬくを季の凡そ袖と云き

昭慶門院一條

山吹吹くものあまの書と本の志くけの程とする

夏山里いすりてゆるふ

後之書より前橋政左大臣

あつらそまかりきり山里の水をきこゆり木の志は

夏季中より

前右近大納言

木も木はたあまの志より涼しけり山川の水

袖涼しく

大日宗秀

志ねつる水乃ひくは涼しけりも涼さなき夏風の心

中首より中におきし心

前大僧正仁澄

夏山の志をきく水は涼しけり

夏季中より

平惟貞

夏りお余木の下に水は涼しけり袖も涼しけり

前大納言家雅

夏涼の涼しき水は涼しけり

前大納言者房

少風の竹より水は涼しけり袖も涼し

高階成朝卿

夏は涼しき水は涼しけり袖も涼し

法下光守

松風と涼もさびしく吹くやと書きてより昔別れを

法下園伴

新ひと庭風も水もいふの葉と月と袖と涼と

従三位為子

風もさびしく涼も静を物もあつり夕山とけの音は去る

三首より梅とれゆきと涼と

院法製

卯ふの夏もさびしくや静のせのあつりる松のけぬ

新ひと

式子田親王

と静のけぬさびしく夏の書きけの涼もさびしくたぬ松のけ

寛治二年百首より

月もさびしくと静もさびしくの静のけぬ

中書法中

後鳥羽院法製

松のけぬさびしく夏の書きけの涼もさびしく

建仁三年言合野草秋近といふ事

前中油言定家

松のけぬさびしく夏の書きけの涼もさびしく

三月晦日松と柳とて言所さびしく書きけの涼

細涼といふ事

院法製

茅の葉と一松と松と吹くやと書きてより池の風

と静のけぬさびしく夏の書きけの涼もさびしく

従二位兼行

風わら河津の波は夏より今書けし袖を清き

なる心を

ぬれ法師

夕暮終る麻乃葉をみみし物に流し行由

みそはすじと

玉葉和歌集巻第四

秋平上

七月一日あけのつるをいそぐ

兼式部

あけのつる霧のりつるは秋のきき世に成る

山重少初秋の公とく人仍りき

前大納言云任

あけのつる霧のりつるは秋のきき世に成る

若公百首より新田山重

前中納言云定家

あけのつる霧のりつるは秋のきき世に成る

初秋の事と 前糸議為相

氣の吹く風とて雲の袖とて秋の事とて
政長百首の事とて

衣笠前由之旨

東の朝とて西の暮とて秋の事とて
道助法親王の事とて

信実朝旨

夕の暮とて朝の朝とて秋の事とて
後暑の事とて

前大僧正の旨

秋の朝とて朝の暮とて秋の事とて
百首の事とて

前大僧正の旨

力ありて吹く風とて秋の事とて

初秋の事と

後一條入道前宮白の旨

吹く風の事とて秋の事とて

初元四年は白首の事とて秋の事とて

後二條院行大僧正の旨

秋の朝とて朝の暮とて秋の事とて

秋の事と

寂蓮法師の旨

秋の朝とて朝の暮とて秋の事とて

前大僧正の旨

秋の朝とて朝の暮とて秋の事とて

早秋の事と

常盤井入道前大僧正の旨

秋のそと空をなす月を雲より公けらの影をみたり

後三位親子

秋のそと空をなす月を雲より公けらの影をみたり

中書省令小秋露をよませりたり

院法製

秋のそと空をなす月を雲より公けらの影をみたり

公長百首をうたふなり

前大御言為家

冬を感ず井をぬる約後天の早あひる夜を来ひり

初冬を

平為時

いづれの書かへもあふふ神の露りせ秋のそと風

飛鳥後よりなる女中のあはれ

安嘉門院四條

まきつる天乃け原に秋をらや秋をらや秋をらや

凡巧責のふと

入道女中返書

庭の面しつそと空をみたり雲かたはる所の秋風

秋のそと

山上憶良

ひと早のつゆをみづるも天乃け原に秋をらや

天曆元年七月七日のあはれ

てふ

天曆法製

秋のそと空をなす月を雲より公けらの影をみたり

女中

花山院法製

秋清方中

院法製

山嵐とらんと葉はらわらで木すの秋をのむく其發

早秋の心を

常盤井入道前右大臣

唐のしるしと田代をうりりて書きてはらわら葉はら

群るる

式子内親王

ゆてふあはむ秋のうき言をねとらひて風すま

惠慶法師

飛せらりつるあまの夕をそ物いとのをねいそあま

因中秋とふ事と

從三位為実

後ふは秋のさるとうきまうなをさ宿かをさるる

秋夕と

永福門院

風をさる雲をいふらひりうき言のあまは秋をさるる

煥倉右大臣

たぐれ柳をいよまはら宿の葉を葉うら秋をさる

山家秋夕をいよまはら事せゆま

院法製

あまの海をいよまはらきき物れ秋の物風を言

御洞園風老権進といふの心をいよまはらけり

七法門院法製

昔あまのつる秋風吹をそりまはら物れ秋の物

秋夕中に

入道前右大臣

あまのいよまはらききけいよまはら風をいよまはら

前大僧正道玄

神代書と見えぬゆゑに其書を授けりし所なり

新と續ゆりたり 山階入道前左大臣

其書よりそ兼りたりと見えし所なり

從一位前良女

予らるる日子や其書より小倉子と見えたり

章義門院

嘆息れすも其書にみえりて又其書に

中細言家持

高倉の形ありて其書にみえり

屏風の形ありて其書にみえり

ころり

堂式部

神代書と見えぬゆゑに其書を授けりし所なり

赤光由裏首書ありて其書にみえり

用白前大臣

其書にみえりて其書にみえり

前系議為相

梅より見えしと見えし所なり

秋方中に 二系法親王守元

其書にみえりて其書にみえり

三十首ありて其書にみえり

院法書

予へさうなる歌の末より露のちりて花の葉をるる庭の露

入道末吉改大臣

数に月ひるるさうしりきりけりぬる庭の露の葉をる

前大臣御言為是

露のちり小葉子とて予へさうとて吹るる風を花をるる

貞治百首女めされきりて花露を

後醍醐院御製

ある露のちりて白念の葉のちりて花の葉をるる庭の露

前大臣御言為是

とてめこりけり花の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露

大宰権帥御製

わさねのちりて花の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露

入道前大臣御言為是

花の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露

遠く花のちりて花の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露

この葉のちりて花の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露

萬葉の初めより二首言後約り分小葉をるる

後二位隆博

花のちりて花の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露

同後葉花とて花の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露

新院御製

花のちりて花の葉をるる庭の露の葉をるる庭の露

とく病を悟てゆくと百葉の歌はむとく物もはな

大日貞重

ひの風は秋日新に秋葉の如きなりや深き海は

前大僧正実兼

月枝の露もさ清の露あけの故にまらぬ秋の夜

藤原行成

うとてやと霧の朝の女節を花のすまことたはらむ

後一條院清村上皇は初殿上へさう神の歌は海も

由らかるりとりてゆりきる中宮城方の墨懸所

りみまとい女節花の枝とさるるをさく後ゆりも

坂河右大臣

一言は秋のまことあつゆと秋をさるりありとこひを

女節をさるりませゆきり

崇徳院清和

乃人とはわたりと秋のこひをさるりさるり下れ

ありあり日女節花の枝とさるり人ふつりも

中務少輔平親王

秋の匂をさるり女節をさるりさるり成けり

亭子夜更合し女節花を

後人志次

白露乃とけり秋のまこと秋の葉は電をさるり

さるり秋の葉をさるりさるりさるり

法慎云

かゝりあつて見ゆるすく女言ひあつては思ふ事あり
昔はた露のよはるは見えしあり

中務

ちよき和といふてあつて女言ひあつては思ふ事あり
お園寺あつてませしあつては思ふ事あり

承福門院

たゞのよはるをいふては思ふ事あり
罪らあつては思ふ事あり

刑部口頼輔

あつては思ふ事あり
中原師貞朝臣

月影のよはるの思ふ事あり

原博也

入道前太政大臣

あつては思ふ事あり

白首番あつて

大飛つ有家

あつては思ふ事あり

百首あつて

将中細言治平

あつては思ふ事あり

秋風也

從三位親子

あつては思ふ事あり

あつては思ふ事あり

承福門院

あつては思ふ事あり

新院清製

新院清製

秋の風は神の御心は清く

朝露と露の清く

入道前太政大臣

秋の風は神の御心は清く

名前の百首清製の中

順正院清製

かりの葉はけしき清く

十首の百首清製の中

中務卿具平親王

秋の風は神の御心は清く

三首の百首清製の中

侍中御言兼季子

秋の風は神の御心は清く

秋の風は神の御心は清く

永福門院内侍

秋の風は神の御心は清く

百首の百首清製の中

後鳥羽院清製

秋の風は神の御心は清く

秋の百首清製の中

前大納言為基

秋の風は神の御心は清く

建保四年秋の百首清製の中

大蔵卿有家

名れ時をせしすの白鹿のたきまのくにありて

神らる

藤原義景

栴檀の此れをたす家室とありてそのまじりて

露と後約り

前宮白大政大臣

露けされ袖のたす家室とありてそのまじりて

後入

とたはるる家室とありてそのまじりて

源信兼朝臣

雲のまじりて家室とありてそのまじりて

藤原定成朝臣

物たをたつてはらりて露のたす家室とありて

守元法親王家平有言小

大蔵卿有家

秋のまじりて家室とありてそのまじりて

物室中に

赤中 由之定家

公室のまじりて家室とありてそのまじりて

建曆有言小

赤大信正慈娘

わさしのまじりて家室とありてそのまじりて

子有言小

從二位家隆

物たをたつてはらりて露のたす家室とありて

神らる

貫之

山と海と首首よりくし秋秋と云ふは麻の節と云ふ

躬恒

日る屋と云ふは秋のむし時を凡とて麻の節と云ふ

後人不知

乃と云ふ麻と云ふは秋の節と云ふ

従三位頼政

葉と云ふは秋の節と云ふ

冷泉前太政大臣

節と云ふは秋の節と云ふ

藤原永光

麻の節と云ふは秋の節と云ふ

秋の年中

新院法皇

節と云ふは秋の節と云ふ

三斗首なりと云ふ野麻

従三位為子

矢田抄や麻を此露乃雲と云ふ

従一位兼教

有く麻の節と云ふは秋の節と云ふ

秋の年中

藤原冬隠朝臣

有るり本下云ふは秋の節と云ふ

實成社なりと云ふ百首の年中と云ふ

皇太后云ふは後成

そのむねたる花より霧のまじりてあはれなるを
後治百首歌小初巻と

衣笠前内大臣

またたけのうらみなきをわづらひてはるかに
目公と

後二條院法皇

物風のよき初巻にありてはるかに
伊勢と

伊勢

すゝめ雲井をよめと初巻のむねよりわづらひ
重之女

重之女

園より地はなすに初巻にありてはるかに
正治二年百首歌ありてはるかに

正治二年百首歌ありてはるかに

或子内親王

又の初巻の風よきを霧はあはれなるを
初巻後巻ありき

後一條入道末室白河内大臣

扶風雲井をよめと初巻のむねよりわづらひ
十五番歌合

前大臣信正慈徳

あはれなる初巻のむねよりわづらひ
百首歌の中に

中務卿宗孝親王

あはれなる初巻の本字よりわづらひ
雁とありき

二條右大臣末文蔵

あはれなる初巻の本字よりわづらひ
前中御言定家

前中御言定家

山分は雲のふもとを霞にまみれくはるる存りつれ

大御之為家

秋風と日影のしるしの書とをぬらるる山吹を鳴るる
きうたけをせきさきけくひるるあやにの存りつれ

百首のうちに 院法製

雲にまみれたる雲にけしつるのうらたけの存りつれ

從三位親子

ひるはるのふもとの存りつれ 春の葉をそよ風の吹く

雨中の序 永福門院

秋のふれをむくふの書とをぬらるる山吹を鳴るる

建保五年九月家之秋三首のふれをぬらるる雲の回

老翁の入道前橋の存りつれ

夕暮のふれをぬらるる雲の回をぬらるる

百首のうちに

從二位の家

惟ふと夜ふりけの秋風のしるしの書とをぬらるる

日吉社ありきる百首のうちに

皇太后の存りつれ

如る序ありけの秋風のしるしの書とをぬらるる

群一の存りつれ 人磨

序ありけの秋風のしるしの書とをぬらるる

院法製

月すく風をさきき枝乃新れらるの葉をひけ枝ぞく

秋の序中

廣義門院有寧子西園寺康長女時明院女時

月をまき新をそめぬ冬今これゆらひひの葉をたきき

院時製

かけぬ虫の聲あはまにみちをらる今も枝のふれ

秋風にゆりまき比七條名言よりそらるるまき

よらぬ枝ひとゆき枝の感すはれせとのた

ませりりまきりゆきまきり

伊豫

むむとゆきまき枝の聲に種をまきり新をそく

秋の序中

和泉武敏

鈴の聲あはらる枝の葉をまきあは成りゆら

あはまきりゆりまき人の依見えはとまきりゆ

まらまきりまきりゆらまきりゆらまきりゆら

秋の序中

西行法師

ゆて入袖あはれまきゆきまきまきまきまき

秋の序中

平通時

そく虫の聲あはまきまきまきまきまき

秋の序中

権大納言冬教

霧の風あはらるまきまきまきまきまき

秋の序中

湯魚王

夕月半ありと志のふ白露のそくををきりて

人麿

草畑を養つて時節の移りにあはれん

秋をそそ

藤原敏行朝臣

すまの秋をそそる秋の形ありす

高弁上人

新れ我とすむる事とまはれり

虫とあは

卯りは卯

秋の朝とむらやみとあはれり

前右兵衛清隆為教

鳴わの友とあはれと養ひ

後人志寸

うき世をいばるの虫はよく

うぬの世といはれとあはれり

ふまやゆかり

法皇御書

野下とらつまる虫の鳴と

ねとんを

新院少卿

まろの秋をそそる秋の形あり

持信正信

口のまはら宿る秋の形あり

秋を中へ虫

入道前右政大直

言のまはら宿る秋の形あり

衣笠前由之長

美濃を指す乃秋の下まにらるるもまゝの秋の秋
舟渡より首首より一室の中に

女前門院三條

そらにわひける風を吹くくそふれを秋の田
露を積りりやふ

入道おち政大臣

と山田指葉をくそ吹風をりすよとつぬれり
秋の中に

藤原光俊朝臣

留るは山風をひ秋の田玉の春まひぬれり
前中御言定家

秋乃葉かたり風の秋れを厚く指す秋まをり
指書と

院法製

青真のむもほろひ秋れをく心ふれり秋ま
ふり

玉葉和歌集卷第五

秋号下

群一の次

天智天皇御製

日よの海の色旗雲に白くさくさの月秋夜おるは

後人不記

百葉のたまをたらしそわをさくさの月夕あけは

中首御製の中しる有

院御製

まよ書のなほむらりこみ旅をれ月夕新あは

月夕中し

後一位良教

山を山出居ぬかり新くそむねのさくさの月

常盤井入道前太政大臣

あまのまはるの行を鳴丸のそとに海か枯る新

信実朝臣

雲あけの山をえのり園のしら木をさくさの月夕ま

前大御云為の家よ事せゆりさく百首御製の中し

後二位家隆

あまのまはるのあけの首をのたまひ人やわくまはるん

秋の夜中し

順徳院御製

山を山出居ぬかり新くそむねのさくさの月

百首御製の中し

中務卿宗孝親王

高橋の社おとれうら書にねり果のり月其は

月以中し

後二條院法皇

杖せの尾上のねふとも書てゆる世とる月其

家少くしてあふれりきり月持世院其

平貞時朝臣

高橋のそりねねとやたのひんそりそふ公の月

群しら

後三位範宗

雲とぬゆらるるの院にねの葉をひとる月其

大内貞廣

山の上をねの本流きくもりりきり月其

後三位宣子

すえりりたのねのそを風しとるそねとね

月三十日中し

永福門院

そとね月りのひんふんまりきり月其

東寺月也

後三位為子

そりせひらるる風流のそねゆらるる月其

建保二年九月十三日

前大信正慈法

月影の出入りのねりあどゆきり月其

白首番あ合

中代云定家

ねりしあ人のあねねとねりあそり月其

うききりてんぐらひの月のをれにやれ新を志願り

大の辰重

うたなやね吹まふ海風入海を渡りすり秋月

橋月と事と 右兵衛督雅孝

そ城えあつたのき橋代へけて月とせつすみわたり

水に月 法中息基

山守のてんぐらひの月をさつて月をさつて路の石

正治百とまるとまうり中へ

二条院後

秋の事と事と宿を宿と雅と月とやめく事と

飛騨院中系と事と時秋のは西園ちにつと事と

るりきりてんぐらひの月のをれにやれ新を志願り

入道前大臣大信

あつたのき橋代へけて月とせつすみわたり

水に月 法中息基

山守のてんぐらひの月をさつて月をさつて路の石

正治百とまるとまうり中へ

二条院後

秋の事と事と宿を宿と雅と月とやめく事と

飛騨院中系と事と時秋のは西園ちにつと事と

るりきりてんぐらひの月のをれにやれ新を志願り

大の辰重

うたなやね吹まふ海風入海を渡りすり秋月

從三位親子

延つてすまふ公と云ふはる月をすれそみるなりやう

仁治二年百首言事(けり)付抄あり

小侍堤

あつても種をうまひひ月と帯くしはらうとすまひ

群しらる

藤原頼氏

あつても種月の所をうまひ子れはつとすまひ

百首言事(けり)

從二位家隆

海をこもれはつと種月の夜はひりたりあつても

月とすれはる

西行法師

人とあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

前中御言定家

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

院清とのをすれはつとあつてもあつてもあつても

志仰り付月を懐旧といふ事と

前大御言為良

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

月あ中に

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

順徳院清時春間月といふ事とあつてもあつても

前系致忠定

深るる亭盤の枯り抄り月を抄の文はみすれ

月夜中に

大石宗秀

秋の心志はふもとあそむ都乃月とそびゆるを
家二十首寄る久約りふ月を

皇太子后宮之文後成

世はうとそふ心ひん秋とに月をまゝるを海をそま
守首は秋王宮中そま中に

暮は我をもむ秋の月とあうるそまきり
秋とあうる秋の敷とにあらる月とあうるそま

百首中一月

前中納言定家

ふき身とていふあうるそまをれ月とそまを
何とあうる秋の敷とにあらる月とあうるそま
と公すそまをれ月とそまを

菅直孝 柳菰良女

あそむるそまをれ山室乃秋の形とあうる明乃月

山室秋乃そまを 後乃秋乃秋乃

はあそむるそまをれ山室乃秋の形とあうる明乃月

中納言中納言 前大僧正慈奘

ふき身とていふあうるそまをれ月とそまを
持之酒言秋乃中納言に成る月とそまを

つらそまを

後深草院女侍由良

あそむるそまをれ山室乃秋の形とあうる明乃月

百々の中

女子内親王

ついでに井のかりたるおん月を西にそめておぼしむる

皇太后宮女藤原成家十三年三月廿七日

道因法師

あつらひのつらき秋のかけぬは月をそめておぼしむる

深師光家十三年三月廿七日

從三位賴政

秋の夜もついでにそめておぼしむる月をそめておぼしむる

寛元三年九月十三日

西園寺入道前大臣大臣

春にわたりてついでにそめておぼしむる月をそめておぼしむる

月夜をそめて 信云云朝

あつらひのつらき秋のかけぬは月をそめておぼしむる

從三位隆博

あつらひのつらき秋のかけぬは月をそめておぼしむる

三年三月廿七日

從二位兼納

あつらひのつらき秋のかけぬは月をそめておぼしむる

後多摩院中首領より

市中御言定家

あつらひのつらき秋のかけぬは月をそめておぼしむる

大正嘉言

秋の聲をすくえわら月夜をひききとてかきあはる

前右邊の書基石

又ねむむよりなきかきあはる月夜をひききとてかきあはる

月夜をひききとてかきあはる 後二條院法皇

深き水とてしきとて月夜をひききとてかきあはる

一月十夜月十のそとてかきあはる 月夜をひききとてかきあはる

院法皇

かきあはる月夜をひききとてかきあはる

暁月

のりあはる月夜をひききとてかきあはる

嘉元百首あはる月夜をひききとてかきあはる

開白前太政大臣

雲をくぬきあはる月夜をひききとてかきあはる

月夜中に

特申御言云雄

月夜をひききとてかきあはる

前系後雅有

あはる月夜をひききとてかきあはる

廣田祐三合

基後

あはる月夜をひききとてかきあはる

建仁元年月十夜月十のそとてかきあはる

皇太后宮女修成

あはる月夜をひききとてかきあはる

月日方中に

朝平門院

あふゆゑのひらた敷きこてすこころのあつた

藤原家成朝臣

とらふ都乃を月めとてたきあすまのあつたけ

暁霧といふ事と

平貞時朝臣

ふまてたらしものりてあつたの月とてまのあつたけ

群ららぬ

右原為成

あつたけ雲月林のあつたけとてあつたけのあつたけ

藤原家成朝臣

あつたけあつたけのあつたけとてあつたけのあつたけ

桂方よりあつたけとてあつたけのあつたけとてあつたけのあつたけ

よきゆかり

深木皇太后又信濃

よきゆかりとてあつたけのあつたけのあつたけとてあつたけ

秋津方中に

永福門院

よきゆかりとてあつたけのあつたけのあつたけとてあつたけ

秋津方

中務卿宗考親王

よきゆかりとてあつたけのあつたけのあつたけとてあつたけ

平時妻

よきゆかりとてあつたけのあつたけのあつたけとてあつたけ

今出川院持中御

よきゆかりとてあつたけのあつたけのあつたけとてあつたけ

晴後青い藤原朝臣とてあつたけとてあつたけ

土御門院以襲

言ひつゝ子むらひ乃山ノ事務略てわをれと承ひて模そ

用務

常盤井入道前太政大臣

志丹より頼るあひ板の定乃も金の持乃中書方

群らる

前中御之定家

成乃もあはれ勢い久られくをりてあろくわき乃書風

延和二年中言月次屏風

貫之

山形あへんやまといふ川勢乃たらふを流してたりあ

あま番多食

土御門由之

約りも核の心い勢いあて之流の川あて舟よるあ

群らる

若原宗徳

模のえれあひをむつ約者れをあへんあおの持せ

秀とらる

藤原秀長

あまいしつて守りて皇宮のまはあへん書き見り

前参議雅有

印面よりあはれ筆のしと流かり書とれあひの持あ

秋方中に

あ系改変後

約りも核の心い勢いあて之流の川あて舟よるあ

平宗宣朝臣

ほ見え浪らぬ勢いあへんあろく各あひの心あへん浦松

建保元年八月模方合

百首のうちに 後二筆後清製

海より来るの枝をのこせよと云ふは是乃る色のもて
百首のうちに 後二筆後清製

皇たる后をたす後成

月きく人さるの卯の雲はをて却るるのさうりなり
むすむす

平長時

いさよ月と夜をいさるもて枝をけぬとむらあり
源家清

善くはねるるも費と云ふも平の事さい公を捨る
入道前太政大臣

今より月の名さいひるまていさられけしるあさり也

ふも百首のうちに 醍醐入言前太政大臣 良平云

衣よりさるるもやる枝をけぬと云ふは月めりいさり
百首のうちに 前中御云定家

ふれぬ枝乃ら枝の風とてあらふもけく枝乃ら室
本林紅葉 兵部右有教

ろのゆきもさ枝のよひ葉枝をいさりと人のりもぬ
飛山院よりぬさるる秋十のさるる

近政門院新太御云

小倉山秋とら枝乃らもやるもけく枝乃らあそゆき
建保四年の裏百首のうちに

西園寺入道前太政大臣

た深ゆかおのむすお樂くまわさるのゆましん

秋言り

前大御言為氏

行方^{サマラ}の平まあつを越風さじのりそをく

水^{ミヅ}をぬるあく秋言りかゆり

あ中御言定家

名^ナらひびひの長はうとお祭まうたさみき秋のき

九月十三日^{ツキ}のしゆらと流米地^{シメ}をゆけ

つとま^ツとあつり^ツまう^ツあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

ひ^ツと^ツあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

是後

秋言りあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

秋言り

院新宰相

秋言りあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

秋言り

前大御言為家

秋言りあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

秋言りあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

秋言りあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

秋言りあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

院新宰相

秋言りあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

秋言りあつり^ツひ^ツと^ツあつり^ツ

院新宰相

はあつらふ袖やうははと雲のふちをくわくくわく

長祿の隆親

りよきのたまふををてんかきうはせう千代のもぢ

菊とよきゆりり 平舟時

信をり梅り菊とよきゆりりをてんかきうはせう千代のもぢ

寛平菊合ふたはゆりり菊とよきゆりり

よみ人

たよのこしとよきゆりり高り菊の志はくわくをてんかき

延喜の菊合ふ 平希世の白

菊のたれ菊とよきゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり

天曆七年内裡菊合ふりゆりり

中務

そよのすびけり菊とよきゆりりゆりりゆりりゆりり

上皇の菊合ふ 又貳三位

うすのこしゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり

庭菊 前大信正慈順

枝と葉をゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり

建保内裏名菊百首

前中御言定家

任約ふゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり

百首の菊合ふ 後鳥羽院法皇

山とて此書のあつたゆりりゆりりゆりりゆりり

紅葉寺と

従一位教良

深草のむらじらのことお茶屋にうらみけり

権中御言兼宗

秋山のむらじらあそび下りきお茶屋まうけり

備正實越

みひらふあそびけりむらじらあそびけり

後三位行純

秋葉やふらから深草をわけて多きこころお茶

實治百三の中一毒お茶

前大御言為氏

付母のなるそふ秋のあそびだらあそびのあそび

良岑のゆかり付ふ人御言

慈道法親王

わきそおのちもあそびに都乃あそび

秋のむらじら

権大御言宗家

秋のむらじらのお茶屋にうらみけり

鳥羽院信なるもあそびに都乃あそび

事とよきゆかり

前中御言彦房

まねする志田のあそびあそび

紅葉と

赤人

秋のむらじらあそびあそび

人丸

言林史類約多

行信正賞園

夕飯久々をいぬる事此志をあらわすもいふべき事

中原仰宗約旨

晴まらぬ下此きりては子修らざる事

西行法師

秋あつよといひの聲はきき我をいふあや

言林史

前大納言雅言

山方と秋の氣とたるとをいふ事なる事

秋夕

遊義門院

秋夕とていふ事なる事

秋川院とていふ事なる事

前中納言匡房

秋夕とていふ事なる事

野言林

後三位親子

秋夕とていふ事なる事

秋夕

静仁法親王

秋夕とていふ事なる事

或る心親王

秋夕とていふ事なる事

家一古首とていふ事なる事

入道二京親王賞性

秋夕とていふ事なる事

秋言中一

前系後為桐女

雲のち移山の事本物といわれしをて杖を金に

竹中御之巻季子

むのち成敷のこゝろ事と事とこゝろをて杖を金に

名百首言ありされり竹中御之

順徳院法皇

むのち成敷のこゝろ事と事とこゝろをて杖を金に

名百首言ありされり竹中御之

むのち成敷のこゝろ事と事とこゝろをて杖を金に

皇太子名言大ま信成女

むのち成敷のこゝろ事と事とこゝろをて杖を金に

著秋月とあるを 後光の巻も前信成女と云

ゆのちのわねとあるも月のあつる月杖とあるは

九月事とあるは 前信白と云大信

ゆのちのわねとあるも月のあつる月杖とあるは

竹中御言云雄

長月日敷る字ありあるをて杖を金に

九月事とあるは 前信白と云大信

今上法皇

ゆのちのわねとあるも月のあつる月杖とあるは

名百首言ありされり竹中御之

入道前太政大臣

弟本之記ありてふらんをいふはまらるるを物と云

著抄十首ありて付

前大納言為兼

公とありて若末代もともなるものなりけり此の如く
園軸院のりる山と木とをまゝ分けて月晦の夜
ことごとくさうことごとくあるをわたりゆらん

前大納言云任

我ふもわらわらぬ物なきにいつくすはあ
秋ありあはれ

玉葉和歌集巻第六
冬年

久安六年宗法院上首有方よりけり付

藤原清輔朝臣

山の乃^ノ嶺^ノ崎^ノと云はれし風もたきく冬はあま

冬の中に入道前ち政大臣

らまはれたる命は山ありてやう冬はあま

從一位教良女

久安の春の秋のうらみもまじくもてあめちり

名あ首有方 花園たて長家小大進

福受す床の付ありてあまの神のおまひ

因居付ぬと

西約は師

をたつととらるる食方るるの山ありする付ぬと

百首言中

前中細言定家

ちゆととらるる食方るるの山ありする付ぬと

後中細言中

宮内

時ぬつたれた家ととらるるの山ありする付ぬと

冬言と

後九條前内言

風しをねるの付ぬととらるるの山ありする付ぬと

山ありする付ぬと

後九條前内言

吹さつたれた家ととらるるの山ありする付ぬと

冬言と

冷泉前内言

ひりぬるの付ぬととらるるの山ありする付ぬと

百首言中

後中細言中

神ありする付ぬととらるるの山ありする付ぬと

山ありする付ぬと

小午

ねつととらるる食方るるの山ありする付ぬと

冬言中

土御門院言

ひりぬるの付ぬととらるるの山ありする付ぬと

前中細言定家

前京基威御臣

ふみ雲を以て御此吹ひくわりのをせむし御

永福門院治部

阿の吹本榮ちりうふをねむしをきけし御あり

前中御言定資

おのり言此本榮しうねむし御

前大御云為家

そのけし本榮を御せそ久く御あり

從二位隆博

ちりきける御の御榮を御せそ久く御あり

寶治百首歌子とまつのやうに二二の落葉

前泰教忠定

おのりねらるるの文御の御

持の院五あの中言の合御の文と

入道市右衛門

名を守る御の御の御

前少将部純信

ゆりねむしをたねり入京をてあり本榮の

前一人守

人言の御の御の御

前中御言定房

おのり御の御の御の御

西行法師の御書

冬は雪の降る時、風の吹く時、草木の枯る時、

前大徳正守登

時、鳥の鳴く時、人のあはれむ時、草木の生る時、

百番の合

順徳院法印

秋は月夜の静けさ、朝の日のあけぼの、

冬の中

永徳院法印

春は花の散る時、雨の降る時、

赤用白大政大臣

夏は雨の降る時、風の吹く時、

法下真実

冬は雪の降る時、風の吹く時、草木の枯る時、

平宣時朝臣

春は花の散る時、雨の降る時、

云生忠岑

夏は雨の降る時、風の吹く時、

西行法師

秋は月夜の静けさ、朝の日のあけぼの、

兼平七年右大臣家屏風に書かれた御書

此の上本

貴之

冬は雪の降る時、風の吹く時、草木の枯る時、

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

後頼朝臣

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

平井河

惟明親王

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

後三位為子

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

前右近大將家教

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

平貞房

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

平長百三十一^{ハナノヘ}河邊^ノ遊^ユ

常盤井入道前太政大臣

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

河邊^ノ遊^ユ

法皇御製

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

藤原為成

藤原為成

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

河邊^ノ遊^ユ

平宗泰

平井河邊^{ハナノヘ}遊^ユ遊^ユ下^シ人^ノ心^ヲく^レり^とく^レり^とあり

後一條入道前右大臣

山陰乃家^川にのりともり榮へまゝ水も流れてきたり

多言番多言 惟の親王

わ〜吹半宿の浪世を本意つとてふ能く御本

群〜ら次 人磨

りる榮と木との付あはれ方今一転とてゆひと辨れ

堂をゆりてあすともあひれ月付あはれり榮かさん

東りの勢とてふあまの山の山と十月のこのはら

榮まきゆりしふしなれ

菅原孝標朝臣

わ〜吹こころれ海はなまきいんてつらちをばせり

いんてつらちのありかりとつらり橋上似つらとみく

并乳母

神の月とみらとあつ初君のたりたふら初とては

群〜ら守 皇太后らと文後成

河と冬はつきに群田ゆのみり花まきせうと水きり

入道前を政大臣

神の月抄のみらと庭の菊枝のみをいふふれひん

菊宴とらせ海守 延喜法御書

折とこのあつらとを神の月書とてそむじゆら

延喜法御書十月女房常^書神の果つと菊と

ふ〜ゆりり 町虎子

な〜初とみらとを菊花はまきとそらとつら

冬山の中 翔平門院

冬山の中 翔平門院
多はふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく
右近中将道輔

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子
幾ふふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子
幾ふふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく
雪のうきくうり杉のうきをふく

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子
幾ふふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく
雪のうきくうり杉のうきをふく
基後

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子
幾ふふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく
雪のうきくうり杉のうきをふく
基後
西行法師

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子
幾ふふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく
雪のうきくうり杉のうきをふく
基後
西行法師
山家冬月とて事な

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子
幾ふふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく
雪のうきくうり杉のうきをふく
基後
西行法師
山家冬月とて事な
冬宿のすまゝ 宇治の山家 月夜をひそめてみれば
群一らす 右兵衛督雅孝

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子
幾ふふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく
雪のうきくうり杉のうきをふく
基後
西行法師
山家冬月とて事な
冬宿のすまゝ 宇治の山家 月夜をひそめてみれば
群一らす 右兵衛督雅孝
前年秋家親

冬山の中 翔平門院
白雪の中 式子田親王
寒樹とよゆり 後三位為子
幾ふふの雪ふ杉の久宿のひら杉のうきをふく
雪のうきくうり杉のうきをふく
基後
西行法師
山家冬月とて事な
冬宿のすまゝ 宇治の山家 月夜をひそめてみれば
群一らす 右兵衛督雅孝
前年秋家親
起てふとていそよふる冬月 平宗宣朝臣

葉のうへに霜を積りぬきてはあつと云ふは物への類也
心留るべき故なるの候は首をさかしてまつれば

前中細言定家

山麓のゆけのやうに山あつと云ふは

冬雲也

永福以後

風の音はけしむる積りしむるは月影

冬雪中

前大御言為家

叶ぬわらふたのしむるは

太右兵衛為教

すみののうへあつと云ふは物への類也

葉に霜を積りぬき

中務右平親王

今より霜を積りぬき

賀茂新守けつ百首雪中に千鳥也

皇太子后文宣帝成

河原よりそぬわ物らぬきまたその積をひらぬ

冬雪中

躬恒

冬をぬきすの月影はあつと云ふは

家にあつと云ふは千鳥也

二京は親王守覚

浦に乃葉のうへに霜を積りぬき

後鳥羽天皇

後鳥羽天皇

と氣交疎やてぬまをほのめりてまふ分はひる家はる君

冬あそび

前大納言為氏

雪あけの山乃とふふむの雪よしのの海月乃あけ

君のあ中に

左大臣

ふれうらみのまに雪あそびとふ乃はりあはるうら君

前中納言俊光

かえりあはるぬれ物あくふありて空のあひる君

都らり寸

侍中御之御平

あそびのあひる君あそびあう上と海伊くまの海はあは

侍大納言家定

枝うらみの村の君あそびあはるあの下とふき枝のよみり

冬あそび

大納言有家

移くてすむたをえに自君のあそび海あのかはる

君とまませり

後修儀院清製

ゆめさうふ余成のひの雪あそびあはるあそびの自君

前大納言正道洞

むらさきの水乃まはるあそびあはるあそびの自君

三條右大臣家屏風

貫之

藤乃葉のゆらうらふ今皇月の山あはる雪あそびあはる

新正さうりて今あそびあはるあそびの自君

従三位為子

塩乃たらうらとみりあはるあそびあはるあそびの自君

むすしつ

前番致隆康

のりき浪らのききたりしりしきりき浪ら

水はきき

右島房書基氏

わかれき書指とて書指とて入るき浪ら

中務

中務の宗尊親王

大井の浪らわらき浪ら

信正安貞超

風ら浪らのわかれ書指とて入るき浪ら

前大信正仁隆

夜はわらき浪らわらき浪ら

若雨のち中

大津門院の書

三十一首ありき浪ら

三十首ありき浪ら

西郷の書

あはれ書のわらき浪ら

暁書

若原行房

わらき浪らのわらき浪ら

竹書

前大御言伴平

吹らわらき浪ら

前大信正良信

夕まらわらき浪ら

百首あり

前中御言定家

かきくは新なるるを敷みせりくめと其をばつる君
卒番ま合ふ冬雲とて事と

院法皇

山嵐の松の葉をぬりぬりてむくちのきりらる
勢もさうして今もほろまうらう小原雪と

從二位隆博

滝のりからたると此雪のよをらる物定れ袖のきけさ

雪の中

系中印言為方

まふもさうて日敷そつりやう庭とたえん宿れり雪

藤原貞徳

雪もたもつり風をそ掃とて人の悟のたれとて雪

月清とて東あけゆき伊豆の海を仰り海とて雪あり

むすしん

系系後御威

わらう雪せれ塩風さうしゆとて今もり雪まきり也

群しん

くえんくしん

さゆあつる雪まきり雪あけりその雪まけり雪あけり

永福院

川ちりり月照とて雪まきり雪あけりその雪まけり雪あけり

系大信心道玄

わらう雪あけり雪まきり雪あけりその雪まけり雪あけり

浦千馬

津守国冬

冬も雪まきり雪あけりその雪まけり雪あけり

子多子

比平源深

ひ浪のこゝろをなすまき後には教はき
藤原親威家の子合の回を

勝令は仰

和舟のせを此懐のひ月をせと海夜の子多子あり

用器千鳥とあると 平重時朝臣

清とて笑りてたな海風はゆきかけの鳥あり

海千鳥

前大内言為氏

風をきかけ舟の海の子をこぼしけり

冬令の中

章義門院

春舟は舟もあな夜もあつても海をこぼしけり

式子内親王

子へまわつて休日の軍はわけてり

夕暮の海もあな

前条後雅有

舟の舟もあな海もあな

舟もあな

後京極福政前大政大臣

古月の入りの舟もあな

冬令の中

前大内言為氏

山川の舟もあな

河少

行中細言云雄

舟もあな舟もあな

百首之中に冬多 芝の香も入道前横波の香
さゆり夜に迷の玉をみみくれば少くすゆり浪をく下家
三千首歌をよまきつりし時川少

二系は親王賞助

熊川の志おつきあふりたふぬのゆき香のゆき
九条女長女

あふりよ上いしりるゆり香のゆき
平宗直

さゆり香のゆきあふりたふぬのゆき
廣義門院

物明のゆり浪よい香のゆきあふりたふぬのゆき

前中細言資平

まの香もあふりたふぬのゆき
古寺冬暁とあふりたふぬのゆき
あふりたふぬのゆきあふりたふぬのゆき
香のゆき

前中細言資平

あふりたふぬのゆきあふりたふぬのゆき
雪後雨とあふりたふぬのゆき
延政門院新大納言

あふりたふぬのゆきあふりたふぬのゆき
雪のゆき
法皇御書

あふりたふぬのゆきあふりたふぬのゆき
白敷乃あふりたふぬのゆき
近侍用白前女長女

改るぬ月影寺庭乃君の斗まきてぬるをみる御

清雪とふもを 従三位親子

ありのむ雪乃すまきとてつゆきてゆくこそ竹山あり

雪埋竹 西行法師

君のまき竹を御孫くもひの村産ふ

群しらぬ 右兵衛督雅孝

階つらまきの竹もあふく雪いとれくり里乃てひ

冬山雪中の君と 院法師

早雪とて雪とみゆと君とては吹つて凡と積る

群しらぬ 皇太子名言太后後成

雪のまき竹もあふく雪いとれくり里乃てひ

後感のまき雪のまきまきせゆけり小冬

雪中のまき雪

まき雪のまき雪のまき雪のまき雪のまき雪のまき雪

冬夜後半の雪園にけしき岩井坊雪隠月影

そなたとてみねとてりて積定しつらんとすり対

みねとてみねとてりて積定しつらんとすり対

人まき雪のまき雪のまき雪のまき雪のまき雪

高井上人

雪のまき雪のまき雪のまき雪のまき雪のまき雪

冬山雪中に 永福院

月影のまき雪のまき雪のまき雪のまき雪のまき雪

新雷

民ノ口為世

云々

前中油之資貞高

云々

小井

わん

後法性寺通前田自在

云々

皇太子

本日の珠城

雷

荻原隆信

古

建保

前中油之定家

云々

雷

前田

風

冬

從三位

云々

云々

云々

入

むらさきにわれまひるるをきくはるの君にやうら

左近中将為者

何れあつたはたしよの夕れにのりりききとをり

冬彦中

前大納言為家

わがうらふの唐紙縁のふりまをまけり何れあ

前大納言為家

秘文の上つらつら君にききよきよききよきき

以長百ききききききききききききききき

衣笠お内侍

吹風あつたはる君のてき田に枯野にわれあ

惟明親王家十の首

前中納言定家

あききききききききききききききききき

寛元四年九節官藤原のつむぎう午日節書

のちあの日乃ききききききききききき

後深草院お内侍

九重にあつたはる君のてき田に枯野にわれあ

禁中密にる連 藤原秀長

初めあつたはる君のてき田に枯野にわれあ

文治六年七月廿五日廿五日廿五日廿五日

皇太子后宮大進藤成

年とあつたはる君のてき田に枯野にわれあ

六帖抄とて人よませりと抄多ふ親月

後二位兼納

幸く袖つ孫とひしめこのありなり世のく人

神樂と

入道おち政大臣

おちやいしとあは里神樂とよする事とあつた

三十首ありまはしき東津系

前田白太政大臣

わらわやあまの月乃影をて雲井とあつたわさつた

大花江隆教

焼とて金ねわの庭大影あけて雲井とあつたお倉のよと

名は首首のあま

順徳院法師

雪の由小冬えつあはれ花乃初丹とのめらぬあはれは

雪はあはれ

後法持寺入道前白太政大臣

あはれとまけの初と梅枝をねまはれあはれとあはれ

雪とあはれとあつたあはれとあはれとあはれと

前大御言為兼

木葉をよむしやま枝とまけとあはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

みく

藤原清心

梅えいよはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

佛君と後法持

前大御言為兼

あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

歳言

去年の権^{チカ}わつしとるりとも力に今年此れを出入り

左京大夫源輔

ろめと業ある年とて事運りわつしとるりす之成けり

左京大夫源輔

年とて業ありし事とて一和とるりいふとまにり

天慶四年三月に重清屏風

貫之

ゆ月日川の事とて事とて事とて事とて事とて事とて

後法皇入道前白河宮の百首言まをせりるに歳

言の公

後法皇入道

予世かくつれを事とて事とて事とて事とて事とて

仁形公

強倉右大臣

ひとむのこは事とて事とて事とて事とて事とて

君中歳言

前右兵衛督為教

乃れ方つじ君は事とて事とて事とて事とて事とて

堀川院の百首言まをりる小陣夜とま約り

前右兵衛督為教

色は事とて事とて事とて事とて事とて事とて

後法皇入道前白河宮の百首言まをせりるに

歳言

皇太后后言大夫源成

あはれなり数とて事とて事とて事とて事とて事とて

前内大臣

三途りの三平とてふしつと母と加つぬ言はすあそり
禰^{トモ}成仲^{トモ}在かきしゆらふふまをうらうら

右原隆信御旨

むらび折打つてられ君代と九そらまきく三日月をり

建仁三子京極丸とく有者^{カサネ}也と建^{トモ}隆^{トモ}はれ

ゆらふ

六條入道前大臣

君代のまらめてさぬとつちりあそせとかけとま

祝ひ

御芳門院女御

五代と君とゆらんたれそと若しと先と初と初ひん

小條大臣^{トモ}平賀の屏風とてあふませゆら

右近大将道徳母

ちとらふ月あつとつとゆとあつとあつと

親子内親王御殿のつとまてとつとつと中^{トモ}由^{トモ}之^{トモ}鷹

長^{トモ}壽^{トモ}遠^{トモ}使^{トモ}あつとつとつとつとつとつと

ゆけり

順

祇の寺^{トモ}苗^{トモ}の^{トモ}雀^{トモ}鶴^{トモ}の子^{トモ}は^{トモ}つとつとつとつと

東三條院^{トモ}甲^{トモ}法^{トモ}智^{トモ}屏^{トモ}風^{トモ}の^{トモ}寺^{トモ}

道濟

姫^{トモ}子^{トモ}初^{トモ}の^{トモ}子^{トモ}日^{トモ}と^{トモ}あ^{トモ}ん^{トモ}と^{トモ}あ^{トモ}ん^{トモ}と^{トモ}あ^{トモ}ん^{トモ}

正月七日^{トモ}の^{トモ}業^{トモ}の^{トモ}付^{トモ}と^{トモ}常^{トモ}盤^{トモ}并^{トモ}入^{トモ}道^{トモ}前^{トモ}夜^{トモ}大^{トモ}殿^{トモ}の^{トモ}つ

えきれり

月花の夜

喜日将の子日乃ねのねと年つびとわぬらん

評らぬ

強倉右大臣

とらま方の村とあつて月と花を成るうみりき

守元は親王家に奉旨方といふま務ゆけり

正三位 兼右大臣

つらねさすねのそらにさるさ下みじらねのあかひのま

始川院に侍中を近侍しあつてつらねのそらにさるさ

後頼朝臣

つらねのそらにさるさの地をねと水乃をそらとあかひのま

天曆清の生さるせりてつらねのそらにさるさ

系後伴僧

早さるさつらねのそらにさるさつらねのそらにさるさ

つらね

延喜清書

つらねのそらにさるさの地をねと水乃をそらとあかひのま

延喜七年十月元良親王奉旨女入親王家のそらにさるさ

つらねのそらにさるさ

つらねのそらにさるさの地をねと水乃をそらとあかひのま

延喜十年十月貞信王奉旨尚の藤原貴子のそらにさるさ

つらねのそらにさるさ

つらねのそらにさるさの地をねと水乃をそらとあかひのま

後冷泉院位につらねのそらにさるさ三月而の藤原盛を

つらねのそらにさるさ

出羽年

用白前左大臣

和氣乃海なるるのこま新丸船の成るるに

寄託祝

前信正公書

予の心より神とまじひのまじりしに

寄託祝とあると 平時廣

よりの世をまじりてわらふに

和氣

大信正書

しつらふく末に

建長三年九月

思屋入道前右大臣

むくふり力とね代とて

山階の昔に

とあるに

前実白右大臣

たりあき

守首は

白皇太后

君父いた

寄託祝と

院

世に

建長五年七月

山階入道前左大臣

考へん世々文の事なればわが世もつとつとこれ
蓮生法師半賀しゆらうとてつとつと

前右兵衛尉為教

少のけり半の故を留るるの事よりの事そのま

孝皇親といふを 法下栄繁カキ

天守を皇太子位をかきそむしとて内さひ成りぬ

恒明親王をけりぬ七世の後しゆらうとてつとつと

賀茂左藤朝臣

馬のあし七世の川みきりて八百方代とつとつと

二條院清和中宮の方とて合ある事とて清輔朝臣

殿上のりぬらぬ事とつとつと

平家大貳重家

和名乃海とていふなりとていふなりとていふなりと

今上清位の母大御言三位なりとていふなりと

入道前太政大臣

たかきとていふなりとていふなりとていふなりと

右兵衛尉とていふなりとていふなりとていふなりと

前大御言光頼

つとつとたかきとていふなりとていふなりと

正應元年女清入内りつとつと

後三位為子

つとつとたかきとていふなりとていふなりと

千載集奏後附今のゆくもあはれとすべし

白土右衛門左衛門尉 皇太子右近衛守 文房

和名乃阿子と云ふ原の成りありしうけ成まじき君の御

文集三十三月降古今集竟宴不^ツあせりてよませ

竹分 後漢院法製

三代中てらふくは海名をとりぬる成みけむしりし始

天慶元年大嘗會書總記方近^ナ國稻春^ナ子

ふんくしらす

阿方今く物白^スむまはらりて世のさうりてむりなけり

兼保元年大嘗會書玉皇方さう升村と

前中油言匡房

八^ス調^ス乃^ス白^ス皇^ス人^ス以^ス代^スとてさう升此ひり乃水とすんん

康治元年大嘗會書總記方風信和層^ス自^ス樂^ス急^ス長^ス樂^ス山^ス

左京大夫頭 甫

君代今より此方岩ね杉と交へさるる衣乃のくまて

同法屏風言小昔柳村柳樹衣多

君代^ス臣^スの^スさ^スら^ス乃^スひ^スと^スい^スひ^スと^スあ^スり^スき^ス柳^ス乃^スひ

仁安元年大嘗會書總記方色日樂急本綿園

皇太子右近衛守 文房

ゆきれ見けのかつかきもたのくさつるるあらの

貞應元年大嘗會書玉皇方屏風海中國秋さう山

前中油言頼資

その時ぬきりて空にのれあすりてたさるる方のみらねん
寛元三年大嘗會悠紀方近江守日景被高心

前中細言後光

交れ照と月はあけけききとをそあつくもたれん
永仁六年大嘗會悠紀方近江守日景被高心
後光

前中細言後光

ふもつらあねりさけり花浪乃さりどひさう方代た春
延慶二年大嘗會悠紀方稻春方近江國膳部
あふさうとらぬの里へ世にいさうさう

さうり

玉葉和歌集卷第八

旅行

不知何日又相逢とつふを

大は千里

わきそは後らそふをさつ時あつるあをひとすそ
わひさりけり人の物まらりさるむ此の世はけ
たるありそさまりゆふやれん

貫之

あをわびふらあかそあやあまらあきぬのぬらん

群らる

此郎女

白形乃袖さうりてあをらあかそあきぬのぬらん

十

をよこ國と海よりくる人をつつそくつら

煥余右大臣

山と海を井と石のふたつあえ我のこひり好むや啼は

賀茂社ありやうる百首の中一別

皇太子名言大臣後成

今もよあふの改めりつらそふまた立よりり

近江國まゝりけつとまきりわき行ひかたに部と

約ふよき約きり 藤原清公

こ夜あけしつとそふあひ討ふわき行ひかたに部と

人のこひりつとまきりわき行ひかたに部と

あふよき約きり

西行法師

そのひんきりつとまきりわき行ひかたに部と

みらのあひつとまきりわき行ひかたに部と

源重之

われはつとまきりわき行ひかたに部と

別ふよ 兼 越はゆ

待つらんおらとあふあひわき行ひかたに部と

前中御所定家

はつのもよわれ地つとまきりわき行ひかたに部と

兼平五年十二月の日は死親衛よりつとまきり

餓ゆつとまきり 源云忠朝吉

口邊に人まわしとて頼りて後とて我も我も由ん
小條たて居死んてはゆきつ東下女とて我も
そととつりてゆきつにゆきつとつりける

後人へつらぬ

あつとつりてはらへむけの事とてあつたるなり
わつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり

西行法師

あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり

人麿

あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり

院法師

あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり

式子由親王

皇太后后宮女御

あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり

正三位

あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり
あつたつりてはらへむけの事とてあつたるなり

むきさくらのとまよませゆふ小妻様とある也

永福院内侍

かゝる存され様子の深しうと教ゆははとていひまう

配水かく帰存をまうてよ久ゆけり

前権守信部合真

うやまうの存の言ふれはと成りしとまらゆらん

群中見花とある也 前中御之定家

かゝるたらしとまを存の言ふれはと成りしとまらゆらん

定津山あり 中務の宗為親王

とまらゆ存と祝もみりて本にけしむる言ひの言

東まうりるに聖路とある也と目言ふりて討むる

うらそりいせれと 女前門院三條

うらそりいせれと袖の言ふれはと成りしとまらゆらん

曰道ありとまを存の言ふれはと成りしとまらゆらん

言ふとあるにせれと存ひつげら

様とあるにせれと存ひつげら

治三年百首ありとまらゆらん

直秋門院丹後

和する存の言ふれはと成りしとまらゆらん

和する存の言ふれはと成りしとまらゆらん

わすれやとまを存の言ふれはと成りしとまらゆらん

以長三年九月十三日由事十とまらゆらん

從三位行家

中ノ志ハ戦ハル毎々も逢坂の志ハルマシク月日とて並
東下約多クに相坂なりと

前糸織純清

あまき此用ノヤあまき此用ノヤあまき此用ノヤあまき此用ノヤ
遠き國小約多クに相坂なりと

平康頼

秋ノ今ヨリとけのねとよきゆけり

藤原清正

藤原清正の志ハルマシク月日とて並

百首言とてまろり中ノ戦旅

前大納言為兼

二河ノ今ヨリとけのねとよきゆけり

大宰大貳後兼

中ノ志ハ戦ハル毎々も逢坂の志ハルマシク月日とて並

中原師宗朝臣

あまき此用ノヤあまき此用ノヤあまき此用ノヤあまき此用ノヤ

左近中将為藤

あまき此用ノヤあまき此用ノヤあまき此用ノヤあまき此用ノヤ

都の約多此より 平宗宣朝臣

新の神よりぬき此の月之こと擲る海をさふ

赤元百首言中核 後二条院大内之曲約

事とさるるの月よりすこし河名を其友と云ひは

田心と 二京法親王性助

其の杉山條より素よりいふ事なりと云はれり

新中月といふ事と云はれり

中院入道前内之臣

核のよき所はけは其處にありし所は其の朝臣

新中乃心と 丹波長曲朝臣

新より新の心は此の心なりと云はれり

新の約多此より 大信正朝臣

おひわく

月之けきひの友と云はれり

新の約多此より 新信正朝臣

新信正朝臣

時より約多此より 後法性師

後法性師入道前内之臣

新中核の心と 後惠法師

新の約多此より 新信正朝臣

新信正朝臣

新の約多此より 新信正朝臣

上野よりのおりきとらるは信とらるは信
月とせりうくゆけま

菅原孝標^{タカ}孫女

ゆきうととらるてらるてらるてらるてらる

中務

とらるは信とらるは信とらるは信とらるは信

赤人

秋風のおきおふさお思ふとらるてらる

道助は親王家の中野孫

西園寺入道前右大臣

とらるは信とらるは信とらるは信とらるは信

後白河院
入道前右大臣

おあけりおとらるお思ふとらるてらる

前田大臣

お思ふとらるお思ふとらるお思ふとらる

後白河院
合辭中興

前中御門定家

お思ふとらるお思ふとらるお思ふとらる

後白河院
合辭中興

後徳大寺大臣

お思ふとらるお思ふとらるお思ふとらる

前系次卿

那波の河の丸屋の孫おのり分ぬる所の志つるまゝ
孫公を
あつ信正隆弁

ゆいけしつるふそりの勢あや三國をゆく富貴志ふ
法平白弁

あまそと想をきく東路のねとほつと志川の美
新ら寸
よえんくしらぬ

く飛のの志とあひかたぬとらぬ志の心とあつる
ゆきと連庫すくらうの志とあつる志とあつる

ゆきと分志の志とあつる志の志とあつる
切上郎女

信信明朝は隆興守りまらけり志とあつる志とあつる

の志とあつる志とあつる志とあつる

都給たとの志とあつる志とあつる
中務

孫の志とあつる志とあつる
今上御製

志とあつる志とあつる志とあつる
左近大将實泰

志とあつる志とあつる志とあつる
新院御製

志とあつる志とあつる志とあつる
後二位兼納

瑞倉右大臣

あひまはたしこくをたすけりて
あひまはたしこくをたすけりて
あひまはたしこくをたすけりて
あひまはたしこくをたすけりて
あひまはたしこくをたすけりて

あふゆえの家

あふゆえの家
あふゆえの家
あふゆえの家
あふゆえの家
あふゆえの家
あふゆえの家
あふゆえの家
あふゆえの家
あふゆえの家
あふゆえの家

大宰大貳後兼

大宰大貳後兼
大宰大貳後兼
大宰大貳後兼
大宰大貳後兼
大宰大貳後兼
大宰大貳後兼
大宰大貳後兼
大宰大貳後兼
大宰大貳後兼
大宰大貳後兼

前中納言俊光

前中納言俊光
前中納言俊光
前中納言俊光
前中納言俊光
前中納言俊光
前中納言俊光
前中納言俊光
前中納言俊光
前中納言俊光
前中納言俊光

大日頼重

大日頼重
大日頼重
大日頼重
大日頼重
大日頼重
大日頼重
大日頼重
大日頼重
大日頼重
大日頼重

後三位為子

後三位為子
後三位為子
後三位為子
後三位為子
後三位為子
後三位為子
後三位為子
後三位為子
後三位為子
後三位為子

西のわらふは日よきなる有らむ
西の孫といふを成す事也

院清御製

西のわらふは日よきなる有らむ
西の孫といふを成す事也

前大僧正慈鎮

西のわらふは日よきなる有らむ
西の孫といふを成す事也

前大僧正慈鎮

西のわらふは日よきなる有らむ
西の孫といふを成す事也

惟明親王

西のわらふは日よきなる有らむ
西の孫といふを成す事也

建仁元年八幡宮より合務宮宛

前中御言定家

少實はさきは吹かせ家持の孫は
平政村新良

平政村新良

少實はさきは吹かせ家持の孫は
平政村新良

以長元三年百首より

在笠前田上良

草花のやうに夜あつたらむ
紀皇女

紀皇女

草花のやうに夜あつたらむ
紀皇女

我せをなまるとつらとさ
伊勢國あそぶあの子ら

我せをなまるとつらとさ
伊勢國あそぶあの子ら

ねんの中よりまゝりて新とありてよきゆけり

増基法師

夜をよそしきつれもねね枕をさすのゆけり

ゆけりゆけりそたるせ舟のまゝくさるゆけり

大僧正約考

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

藤子中に

九條左大臣女

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

大仁宗秀

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

信平寛寛

我れも好念のたふれ先をいそぐゆけりゆけり

車まゝりけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

大仁忠成朝臣

ゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけりゆけり

中首よりなげり付旅泊月を

後を羽後までゆく

きこふるふくしの床は信りしをぬる月乃神の宿ん

女流二宮ふりきつたはまはつとふまを風り吹

ぬれねるえれ皆あまの唐より月乃もりなるを

久く

西郷は仰

湯の湯とていけあすの留とて月乃新とてありあく

群一らふ

中御より平

くさひらむの神えとまねたは皆屋とて心を信浦舟を

難波と幸むいふくふ舟のかりくさるる舟を

云生忠見

すあえさゆきふ舟つるをなをうとて冬は河井の船

旅平

人丸

あきらなり舟つるされのそぬれ妹のひまの神と吹を

赤人

鶴つふい豊鶴のされを書ゆけは屋まをそく鶴さといふ

高市一里人

旅後を書てゆれえ近はらや屋を信とていさふ舟を

笠合村

わらし女たふくは信り下橋のやまにかり乃書ゆゆ

信音ふとくまうそゆを

系五捕親

まゝらぬ班岐の道ありて各なきりてやすしう其海
はく本約多るをて 重く

わが此を渡の所なる船の部なき物とて之
に長百首の中へ海路

衣笠前内大臣

わが所りふれはれとて各なきはり此海ありて是は

難事の中に 豊原政秋

とていふ多のまゝりたはれん凡まゝりたなきり船人

道即法親王家卒そすし海路

從三位行純

わが海のまゝり此後とて各物とてあてそすの少なるはり

照会後入道前内白班岐の方面にけりなるはり

ゆけり 高階宗後朝臣

わがりのりぬらるるはりはりはりはりはりはりはり

けりはりはりはりはりはりはりはりはりはり

前系後雅有

都をて國忘れし海の道とてはりはりはりはりはり

二亥治百そすしとてまゝりはりはりはりはり

常盤井入道前大臣

尋ててはりはりはりはりはりはりはりはりはり

前大臣云為家

そすしはりはりはりはりはりはりはりはりはり

粟田宮より合し寧海船と事と事せり

後鳥羽院御製

二舟りす一船のちきりなまをれあつたしとてはる舟人

旅泊心と

院御製

手ら花一葉をゆりな舟にあまれままりやそのく浦く

前大御言為家

儼然とてまきまきりつらぬる勢をばつとるふれぬ

為意依後國すまりゆり越後國てゆりしよあく

しよとるゆり

遊女初若 君一

物もいづらる海の志成たたらふそふあつたまけ

順徳院御製付右百首言りまされはるふ美言以牧

皇太后言大文後威女

舟もつらみの舟はる海と事かてりたのれをく

舟らり

院新宰相

舟とらして又漕つていふを事かてりたのれをく

旅泊

院御製

舟らりつら月もやとてね海舟もく浪のふり漕つ

正徳百首言りあたてまらるる雑言中し

前大信正意痕

月影と袖とけとてあつたれすもはまのありゆり

旅泊をみる

中務少輔親王

くねれとてい海りまき浦は月舟舟うそはかり

も風もよまらうつゆらぬれははるのこころ

ふかきうらら 清々ゆえ

こころの風も吹とねぬくまをこころの風は

群らぬ 貫之

うたもこの海もよまらぬまをこころの風は

むす事ゆらぬ稲穂もまをこころの風は

泰成親王

今まの公たはれれまのむす事ゆらぬ

百々まをこころ 雅成親王

けの國の海もよまらぬまをこころの風は

三三まをこころ 中油言長方

今まの公たはれれまのむす事ゆらぬ

戎子内親王

むす事ゆらぬ胸たはれぬまをこころの風は

廣義門院

むす事ゆらぬ胸たはれぬまをこころの風は

前右近上將云顯

海もよまらぬ胸たはれぬまをこころの風は

群らぬ 前大油言長方

むす事ゆらぬ胸たはれぬまをこころの風は

赤元百々まをこころ 赤元百々まをこころ

むす事ゆらぬ胸たはれぬまをこころの風は

平清盛の御時忠意の公を

入道前太政大臣

其の御時忠意の公を

從二位為子

其の御時忠意の公を

從一位教良女

其の御時忠意の公を

藤原為守女

其の御時忠意の公を

延政門院新大納言

其の御時忠意の公を

其の御時忠意の公を

其の御時忠意の公を

其の御時忠意の公を

其の御時忠意の公を

小野小町

其の御時忠意の公を

西行法師

其の御時忠意の公を

相模

其の御時忠意の公を

業平朝臣

わらわのふりかへしと申すはさかたのふりかへしと申すはさかたのふりかへし

躬恒

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

わらわのふりかへしと申すはさかたのふりかへしと申すはさかたのふりかへし

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

道義門流

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

源家長朝臣

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

系族譜

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

從三位行純

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

從中御言兼季

あつたのこゝろえはれとて言ふてはなほいふこゝろに

後今より名をいそいで世をさかすき事知らしめ

前大御言為美

何ふ又所をみまはしめあはれにうき事さしては守りて

永陽門院少将

我より見事と志はひてはあはれつる月をたはむる事

蓮生法師

里はさほふをのりてあはれさるる事のまはれりぬ

遷葬中記

後三位季子

後今より名をいそいで世をさかすき事知らしめ

院御書

今より名をいそいで世をさかすき事知らしめ

不達意乃公をよめゆけり

後京極福政前之政言

初瀬川共ては浪の志はしとてあはれさして人こそあはれ

いそいで世をさかすき事知らしめ

和歌或部

そはゆき我やち福をたはむる事さかすき事知らしめ

遷葬中記

清原深養文

そはゆき我やち福をたはむる事さかすき事知らしめ

そはゆき我やち福をたはむる事さかすき事知らしめ

藤原道信御書

そはゆき我やち福をたはむる事さかすき事知らしめ

三つてしるの約分女

平忠度孤臣

根子にまじりて死なば存すを無つてまをふれ

慈母中

賀茂重保

かろりて死なば今と世に生れあひて人事はつそま

堤三位為子

うまに我にゆいよ今にあはれあつたはら

不達意

度義門院

御井にまじりて世をたすせよやあをを替へて

前大御云為良

恨あふくつて死なばあはれにあらはれ

順

われを命のたつて死なばあはれにあらはれ

群ら

坂上郎女

あはれを命のたつて死なばあはれにあらはれ

あはれを命のたつて死なばあはれにあらはれ

生田の海をたけら女はけりてあはれにあらはれ

あはれを命のたつて死なばあはれにあらはれ

辨乳母

あはれを命のたつて死なばあはれにあらはれ

前条後條のついでにあはれにあらはれ

小竹姫

いとわづらひし御方より後之の御方よりと書きたる事
如し

平宗宣朝臣より後之の御方よりと書きたる事
如し

平宗宣朝臣より後之の御方よりと書きたる事
如し

平宗宣朝臣より後之の御方よりと書きたる事
如し

平宗宣朝臣より後之の御方よりと書きたる事
如し

常盤井入道前大納言

平宗宣朝臣より後之の御方よりと書きたる事
如し

後二條院前大納言

平宗宣朝臣より後之の御方よりと書きたる事
如し

平宗宣朝臣より後之の御方よりと書きたる事
如し

不達意

從三位為子

平宗宣朝臣より後之の御方よりと書きたる事
如し

有平宗宣朝臣

新よりみよかむ此整あくひんさる中此山の丹志水

大石忠成知良女

うき之をえぬれ浦のわが殿さだまうけし方おれん

前大御云實教

これ中より後浪のこい貞好いふすかきさくさく

禮部成實 賢一

つふて禮也ゆき其の節と人小志事ある事い孫う

む事ゆりはりあさるの用とゆきそよゆけり

前大御云隆房

つふれとあさるの今りる事此家あはは終りかき

不遇恋と

赤糸強雅有

ふらにききうひつふせあそこいねまふり此種ききあ

わんきまふりいさる今はうけり

小町

おのきとといろ物とひいねりその君とけさみりあ

戀字とと

躬恒

わんきとまやとねり本れさるい人をすらわぬれ

重之女

きるあはれ事あまきと事あゆみ荒りりし物をねるね

順

いんさくしすねらるのん麻呂年うあふ今あはるをりを

赤糸強雅有

所く移るるも命たす運命人の志はゆるまら

藤原 昭言 門院権大内言

奏さぬととなひてはかきやき世とてん

不達意乃んを 女前の後に降

さる世に予らじとひんか下田のさけつとて身は

藤原親方朝臣

はきの世に人らるるをけりけりもれりいとていふる

或る親王家より移さるるをて身はゆるるにあり

平國時

わをさるるはけりけりもれりいとていふる

藤原為之朝臣 藤原為之朝臣

うめはといふよえれ世ありあつていふる余あり

見意 高階宗成朝臣

わをさるるはけりけりもれりいとていふる

高階宗成朝臣

又をさるるはけりけりもれりいとていふる

田田温家とて鶴の心を園く

大内之孫人

ゆり系とてあり我とて妹とてありあつていふる

之方沙汰

櫻乃原とてありのちをさるるはけりけりもれりいとていふる

坂上郎女

くらわむと竹田の系と云ふは、
時形、我意、く

山上 慍良

そくは、つらふは、すい、
まじ、つらふ、まじ、つらふ、
まじ、つらふ、まじ、つらふ、

素性法師

くらたの、ま、ま、つ、
の、は、か、は、
時、あ、い、い、
の、ま、ま、

忠岑

わい、思、い、い、
の、い、い、
ま、ま、
ま、ま、

貫之

あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、

よえん人

あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、

大の、ま、ま、
あ、ま、あ、い、

前大田之忠良

あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、

つ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、

中田之定家

あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、

よえん人

あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、

あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、

あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、
あ、ま、あ、い、

平忠彦

とて海かこもあつらふまにふたはなまけかたつ所は

無の心よ

平長時

丁酉の海まき日れ無浪けせしうと袖も舟すはのれ

二條院清時國増とて事とていふまはははは

つうとつりりり

皇たる后言ふ文後成

妹のふはは中の居れぬすもあつらふまにふたはなまけかたつ所は

寄物無と

前又僧正慈徳

とつらふ海のまき日れ無浪けせしうと袖も舟すはのれ

無浪中へ 院清時製

風のまき日れ無浪けせしうと袖も舟すはのれ

遊義門院

とつらふ海のまき日れ無浪けせしうと袖も舟すはのれ

此のまき日れ無浪けせしうと袖も舟すはのれ

よん人〜次

わゆる海かこもあつらふまにふたはなまけかたつ所は

無の心よ

人丸

吾妹よとて海かこもあつらふまにふたはなまけかたつ所は

清慎云々つりりり 西宮前ささるる

とつらふ海かこもあつらふまにふたはなまけかたつ所は

海の中言ふりり合を癒

荻原仲實朝臣

とつらふ海かこもあつらふまにふたはなまけかたつ所は

玉葉和歌集卷第十

戀弁二

群一

藤原實方朝臣

夕のひかりのいしきあふゆをさたさあきし月影を

月乃あつと暮るあかりのけりせし夕のさふ

田島院法師

ての月乃光るあつと暮るあかりのけりせし夕のさふ

戀詩中二

遊義門院

あつた人の心をあつた月をわかれとせし暮るあつ

大徳院隆教

けりあつと暮るあつたあつたといふ人あつたあつたあつたあ

不言出恋の心と

永福院

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

卒そあつたあつたあつたあ

前大納言為兼

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

從三位為子

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

群一

前系後為相女

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

夜戀心と

平重時朝臣

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

く〜か〜い〜のなるは公お〜き〜く〜の侍を〜

前大御之為意

約の念に〜む〜の口〜と〜

永福門院

と〜の〜と〜の〜と〜

院新宰相

と〜と〜と〜と〜

久遠心と 今上御製

思〜と〜と〜と〜

難約難子

後〜と〜と〜と〜

疾不來意と〜事と

前系紙終清

一〜と〜と〜と〜

著〜と〜と〜と〜

あ〜と〜と〜と〜

小竹堤

と〜と〜と〜と〜

疾意と 九條右大臣

と〜の〜と〜と〜

待意 院御製

と〜と〜と〜と〜

新らる

赤人

神をゆりたるといふ事終つてついで月をまゐ

伴珠

約のそめりやと書きて月を入るとは終はすといふ

小年

あつて約をいふと終つてといふ月をまゐるといふ

月前約意

用白前を改む

あつて約をいふと終つてといふ月をまゐるといふ

前大細言終任

まゐりて約をいふと終つてといふ月をまゐるといふ

平終時

約のそめりやと書きて月を入るとは終はすといふ

前大細言為意

あつて約をいふと終つてといふ月をまゐるといふ

無字として

あゑ終為相女

あつて約をいふと終つてといふ月をまゐるといふ

永福院

あつて約をいふと終つてといふ月をまゐるといふ

あゑ終為相女

あつて約をいふと終つてといふ月をまゐるといふ

終三位親子

あつて約をいふと終つてといふ月をまゐるといふ

左近大將實泰

心こそあひぬる事此れは白く分るる事なりとて
前中御言忠房

いふて目よりこの世に生れしを棄るる事なりとて
群らぬ 小弁一人守

紙書と枕のうて移るる事此れは白く分るる事なりとて
人丸

杖の束とすうとむすつもの世に生れしを棄るる事なりとて
遇ふとす事と 小弁

物事の心術とゆえにわがこととす事なりとて
別意 延政門院新大御云

よしの世を付りまの別をなすかたの事なりとて

百首の中

後事新攝政前大政言

わが事なりとゆえにわがこととす事なりとて

老の老も入道前攝政家とす事なりとて

前大御云為家

別あはれぬ事なりとゆえにわがこととす事なりとて

実業疾云

正三位重氏

心とてわがこととゆえにわがこととす事なりとて

群らぬ

小弁一人守

わが事なりとゆえにわがこととす事なりとて

源頼実

嘉元可也... 暁別窓

法平定為

きあの夜より... 思ひの事より...

左近大右朝光

志願の目だ... 後物と云ふ...

皇太后... 後成

つあま... ね

つに今... 我を...

後朝意

常盤井入道...

歌よ... 齊天女...

天曆法製

な... 暁の時...

前大御言...

ゆ... ぬ

安嘉門院...

さ... 年...

永福院

以縁りてあてれずりつる者おぼつてかたきくかたきあ
けさるる者もあつたのちありこゝろいさそわほひあつた

前右近大將家教

おぼつかいふ言れさうすうらわりのきよくまひいさ
い月らりゆききさけりへのけりきよきまら
かひさうら府とれりてゆきと程てぬいけり
とほそと

和泉戎部

あはれおむきくお今りおむきくまはゆりきよのき
夕戀

遊義門院

あま歌さくそあまあまとなひいそさくさくたれり

從三位親子

心あてあつてこひりきよき海あまきくたつたゆのき

一條内之旨

偽りほきあつたかきひくあつたそくこひりき

平國時

平國時

あひさだをくさひつてああひさだをくさひつてああひ

後京極攝政家言令

前中御言定家

あまいそ我あまひつた言てあつたあまいそ我あまひ

百首言中に

和泉戎部

あまいそ我あまひつた言てあつたあまいそ我あまひ
あまいそ我あまひつた言てあつたあまいそ我あまひ
あまいそ我あまひつた言てあつたあまいそ我あまひ

わんげんちのりあきの日影とこいささやんらみん

たさうへんが 別一尚

うんげんちのりあきの日影とこいささやんらみん

六帖巻のりあきの日影とこいささやんらみん

前大由言為家

みづのりあきの日影とこいささやんらみん

くさのりあきの日影とこいささやんらみん

うらなひのりあきの日影とこいささやんらみん

とささやんらみん

まじく〜ら

うんげんちのりあきの日影とこいささやんらみん

恋弁中に

二京法親王

わんげんちのりあきの日影とこいささやんらみん

天曆抄のりあきの日影とこいささやんらみん

更衣深評子

月影のりあきの日影とこいささやんらみん

月影のりあき

西行法師

わんげんちのりあきの日影とこいささやんらみん

後三位為子

あきの日影とこいささやんらみん

十首弁合のりあきの日影とこいささやんらみん

後法親王

新子...の...
神...月...
と...
...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



